

---

# 煌きの救世者《ブリリアント・セイヴァー》

戦国熱気バサラ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

フリリアント・セイヴァー  
煌きの救世者

### 【Nコード】

N1728Y

### 【作者名】

戦国熱気バサラ

### 【あらすじ】

『皇國からの救世者達 - ASCENDED SAVIOURS -』  
第二卷

<http://ncode.syosetu.com/n8256q/> 第一卷

時は皇紀二六六九年、文月二五日。

強大な軍事力と宇宙開発技術とを恃みに鎖国体制を敷き、平世の発展を謳歌してゐた日本天皇御國に、激震が走る。

未曾有の危機を前にして、初めて本当の『戦ひ』といふものを経験する臣民達。

そんな混乱の中、図らずも第一線で戦ふことになった少年が、一人。果たして彼は、一体何を視、何を悟るのだろうか

## 序章 『開戦（ブレイクアウト）』（前書き）

<http://ncode.syosetu.com/n8256q/> 前巻

時は皇紀二六六九年、文月二五日。

強大な軍事力と宇宙開発技術とを恃みに鎖国体制を敷き、平世の発展を謳歌してゐた日本天皇御國に、激震が走る。

未曾有の危機を前にして、初めて本当の『戦ひ』といふものを経験する臣民達。

そんな混乱の中、図らずも第一線で戦ふことになった少年が、一人果たして彼は、一体何を視、何を悟るのだろうか

## 序章 『開戦（ブレイクアウト）』

皇紀二六六九年 文月二十五日 時間を外した日 〇一時三

〇分

ひのもちあまつすめらみくに

日本天皇御國 富士青木ヶ原樹海地下 地底都市ツクヨミ 理生<sup>シオ</sup>

Ⅱ テスラ宅

「それでリオさん、結局何があったんだ？ わざわざあんな場

面に飛び込んで来たんだ、当然、それなりの事情があるんだろ？」

インナーアースの別荘から戻るなり、トムくんこと真部勉<sup>まなべつとむ</sup>二等兵は、どこか居心地悪さうに私に問ひを向けてきた。伸ばした焦げ茶色の髪。大きな黒縁眼鏡の下の達観した目つき。そして異常に筋肉質な右腕以外、特にこれといった特徴はないわね。約二か月前までは普通に高校生をやつてみたけれど、私の計略により、軍で働くことになった男の子よ。気まずい雰囲気は、彼とその妻・恵<sup>めぐみ</sup>たんがシてゐる所に、私が転移してしまつた所為でせうね。あと、それによつて彼らの蜜月を中断させたことも、理由としてあるに違ひないわ。「ええ、勿論よ。そうでなかったら、こんな強引に連れ戻したりなんか、する訳ないじゃない」

「だったら、勿体ぶつてないで話して、理生。でないと、急いで戻つてきた意味がなくなつちゃうよ」

さう言ふのは、件の恵たん。色白の肌に、映える黒のセミロング。それが、小さくか細い体と相まつて、日本人形みたいな雰囲気を醸し出してゐる女の子ね。足腰が立たないみたいで、彼に寄り掛り放しな所は、スルーしてあげるべきかしら……。彼女も、トムくんと同じやうな縁で、私の下についてくれてゐるの。

簡単に言つと、戦争だ。業突く張りなバカ共が、四度目の世界大戦をおつ始めやがつたんだよ

代はりに、私の守護天使の理世<sup>りよ</sup>が、吐き捨つる様に説明する。頭

の上の光輪に、背中に生やした真白な翼。輝く金髪を三つ編みにして、右肩に掛けるのが、最近のお気に入りよ。口と目つきは悪いけど、何だかんだで従順で、とつても可愛いのだ。

「戦争といつても、鎖国中で他国と交流のないこの日本には、関係のないことなんじゃないか？」

「そうだよ。関わりがない以上外交問題も発生しないし、過去のことがあるから、わざわざ攻めて来ようと思う国家なんて、普通に考えて有り得ないよ」

真部夫婦は、疑ひに口を揃へる。

確かに、私達地底人 ムウレムリア帝国の末裔に伝はる一万年越しの技術力を加へたことによつて、日本天皇御國の軍事力は世界一。実際、二六〇五年の第二次世界大戦は、日本参戦から七日で勝敗が決したし、三五年に仕掛けられた第三次に至つては、三日間戦争の異名を取る程に呆気なく片が付いた。その化け物染みた力による威嚇の効果で、この三十余年、曲がりなりにも地球の平和は保たれてきたのよ。

「だったら、良かったんだけどね。こうして起きてしまったからには、最早その神話は成り立たないわ」

私は、理世に目線を送る。頷いた私の天使は、面倒くさがりつつも、口を開く。

今日〇時、大英帝国・アメリカ合衆国・ソビエト共和国連邦・中華帝国の四国は、地球連合 パスク B A S C の樹立を発表した。それと同時に、『徒に世界を抑圧し、発展を妨ぐる日本天皇御國の態度は目に余る』と言いつけを付け、宣戦布告をしやがったのさ。天皇陛下は、話し合いによる解決をお求めになつたんだが、連中は全く聞く耳持たねえで、計一〇八発の核ミサイルを以て返答としたんだ。無論、全弾無効化に成功したがよ

「な、馬鹿な、核だつて!? 我が国には特定物質崩壊砲があるからいいものの、下手をすれば、奴らに降りかかる火の粉も相当なものだろ? 放射線に加え、核の冬が来て、地上に人間が住めなくな

るぞー！」

「それだけ、向こうも本気ってことだね。…でも、そんな時代遅れの兵器を引きずってのリベンジだなんて、ちょっと、信じられないよ。だって、核が意味を為さないことは、六十年以上前にすっかり判り切っていることだもん」

恵たんの意見も尤もね。○五年に参戦した第二次世界大戦において、米国によつて西京都に投下された原子爆弾は、しんわつ(心)の都(みやこ)の宮城(みやぎ)・皆神山要塞みなかみやまから放たれた特定物質崩壊光線によつて、完全に無効化されてゐる。幾らミサイルの性能を上げたとしても、反応の起点となる物質を消されては、最早意味はないわ。まさか、それが分からない程、相手も能無しではないでせう。

「そうね。仕掛けてくるからには、相応の根拠があつて然るべきだわ。最近、闇勢力の動向も怪しいから、油断した所で何が飛び出してきてもおかしくない」

「だったら、事前に手を打っておく必要があるんじゃないか？」

「言われなくとも、そのつもりよ。　という訳で、軍服に着替えて、天皇陛下の所に行きましょう」

心皇都　松代区まつしろ　皆神山要塞

謁見の間に参内すると、陛下は、険しいお顔で私達を御出迎えになつた。いつもは、御歳を召されてゐるにも関はらず、元氣澆漑として、慈愛に満ちた表情を浮かべられておはすのだけど……。

「理生」テスラ中尉、並びに真部勉、恵、両二等兵　次元上昇支援部隊三名、只今参上致しました」

「三人共、こんな夜遅くに、よく来てくれましたね」

「こんな緊急事態ですから。尤も、それでなくとも、陛下の御召喚なら、いつだって駆け付けますよ！」

トムくんは、鼻の位置に掲げた右拳を握りしめ、申し上ぐる。

「ありがとうございます。……さて、今回あなた方を呼んだのは、

他でもない、任務の為です」

「任務、ですか…？ 確か、私達の仕事は遊撃だったと存じますが」  
恵さんは、小さく首を傾いだ。

私達皇國陸軍次元上昇支援部隊には、特にこれと決まった職務が課せられてゐる訳ではない。天皇陛下より賜った信頼の下、人々の思考の次元を上げるべく、必要だと思はれることをするのが、私達の役割なのよ。

「はい。本来はそうなのですが、今回は、少々特殊な事情があるのです」

「と、仰いますと？」

「とある古代兵器の回収を、あなた方に依頼したい」

陛下は、一枚の地図を出せ給ふ。受け取り仕り、三人で内容を検めると、そこには、特徴的な地形が描かれてゐた。丁度、漢字の『山』の真ん中の棒を短くし、右側をマサカリ状に変形した様なある理由から、私にとつてはとても馴染みの深い土地。

「これは、青森県の地図ですね」

「はい。そこに付けた印の位置、大石神金字塔という場所に、それは封印されています。あなた方の能力なら、発掘もすぐに済むことでしょう。申し訳ありませんが、受けてくれますか？」

「ははっ、仰せの通りに！」

私は敬礼し、トムくん達もそれに続く。

「…しかし、ピラミッドの存在は把握してはりましたが、古代文明の兵器があるとは初耳です。陛下は、如何にしてそれを知ろしめし給うたのですか？」

手を降ろし、少し間を置くと、恵さんが疑問を奏す。確かに、それは私も気になつてゐた。

「ごとういう時、心強い友人がいましたね。その人物に聞いたのです。本人の希望により、名は伏せますが」

天皇陛下の周辺人物に関しては、本当に謎に包まれてゐる。私が会つたことがあるのは、皇后陛下とその他の皇族数名、それから近



衛部隊長右近もとなり（うこん）元就大将と、その部下桐谷きりや（きりや）龍祐大佐くらゐのものだ。特殊部隊八咫鳥やたがらすやら何やらといった人々が、今かうしてゐる間も周囲を警戒中とのことだが、どんな結界技術を使用してゐるのか、私の靈感を以てしても、彼らの姿を見て取ることは適はない。

「左様ですか。叶うのなら、ぜひお会いしたい所ですが……事情が  
おありなら、仕方がないですね」

「もしかすると、その内、あなた方も会うことになるかも知れませ  
ん。但しそれは、十中八九、この国に大きな災いが迫りつつあるよ  
うな時なのでしょうが……」

陛下は、眉根を寄せなさる。先の宣戦布告が、相当な負担になつ  
てゐるのかも知れない。

「陛下、御氣を確かに。そんな事態にならぬ様、我々も全力を尽く  
します」

「臣民各位の為にも、どうか、よしなをお願いしますね。朕には権  
威こそありますが、肝心の、民を護る為の物理的な力がありません  
ですから、あなた方軍人が、頼みの綱なのです」

「……了解しました！」「」「」

私達は、再び最敬礼する。

「では、我々はこれで」

「ええ、期待していますよ。任務の件ですが、別に今すぐには言  
いません。早いに越したことはないものの、もう夜も深いですから、  
一度休み、日が昇つてからにするのが良いでしょう。 ああ、そ  
れから、富士山様にも、宜しく申し上げておいてくれますか」

「任せて下さい」

あー、さうだ。富士山様のこと、すっかり忘れてゐたわ。だうし  
やう、私のパトロンなのに……。

今から行きやあ、問題ないだろ。先に、天皇陛下の方に呼ばれて  
たんだしよ

理世が、高準位世界から語りかけてくる。言ひ忘れてゐたけど、

この娘は普段、霊体のままで侍らせてあるのよね。普通の人には見えないから、諜報活動とかに、かなり重宝してあるわ。

「ああ、龍祐君。前回の様に、送って差し上げなさい。それから、今日はそのまま上がって構いませんよ。いつ、何があるかも分かりませんから、出撃のない今の内に、身体を休めておくと良いでしょう」

「御意に」

低い声と共に、何も無い様に見える場所から、突然一人の中年男性が現れる。

桐谷龍祐大佐。早い話が忍者よ。長い黒髪を後ろで束ねてをり、引き締まった身に纏ふのは、寒冷迷彩の施された着物。見る人を凍りつかせさうな迫力を持ち、中でも印象的なのが、鷲の様に鋭い視線ね。しかし、登場シーンは、何度見ても不思議だわ。瞬間移動テレポーテーションとも物質化とも違ふし……忍術の一種なのかしら？

「いざ、往かむ」

大佐に率ゐらるるやうにして、私達は、御前を後にした。

「よもや、斯様な事態にならうとは、つゆとも思はじ」  
部屋を辞すなり、大佐は、そんな言葉を放つ。

「全くですよ。折角の俺と恵の新婚旅行も、強制終了させられちまつて……」

トムくんは、同調するやうにぼやき、大きく肩を落とす。彼と大佐との間には、ある一件を通じて縁があり、その為か対応や仕草がとても自然だ。

「過ぎたことをぐちぐち言っても仕方ないよ、トム君。ほら、私達がハネムーンしてた所為で人類滅亡とか、そんなの嫌でしょ？ それに、あんな生活を続けてたら、多分私、ダメダメになっちゃってただろうし……」

恵さんは、手を腰の辺りでもじもじさせながら、トムくんを窺めた。六日前の結婚式の時に比べて、格段に色つぼくなつてゐるわね、

この娘……。

「ともあれ、今は、目先の危機についてだけ考えましょう。戦争は、人の心を動かすに当たって、この上ない材料よ。これがどう展開するかによって、アセンションの進み具合が大分変動する筈だわ。醜態を晒せば、それでももう死活問題でしょうね」

「じゃあ、一応、戦闘の覚悟はしておかないとな。アシガルの出番があるかどうかは分らんが」

因みにアシガルといふのは、軍が倉越重工の協力を得て秘密裏に開発した、汎用人型機動兵器よ。身長三六m、体重五五〇トンの巨大ロボットだけど、格好良さの欠片もない機体なの。

「うむ。お主は実戦の経験のなきが故、十分に気を付けるのだぞ。とりわけ、今回は、市街地が敵の標的にならむ。落下物や流れ弾によりても家屋を破壊せぬやう、よくよく目を配れよ」

「諒解です、大佐！」

トムくんは、威勢よく返事をする。安請け合ひし過ぎだとは思ふけど、元が真面目な彼のことだから、まあ、きつちりやつてくれると信じませう。

「危ない時は私達で援護するけど、それでも、本当に注意だけは怠らないでね？」

「分かってるって。ところで、やっぱりリオさんも、アシガルに乗るのか？ 確か、前に、自分の機体があるって言ってたような気がしたんだが」

よくもまあ、そんな細かいことを覚えてゐたものね。

「いいえ、私はロボじゃないわ。父さんが作ってくれたモビルアーマーがあるのよ。言い忘れてたけど、恵ちゃんには、その砲手を務めて貰うから」

「え、わ、私が？」

恵たんは、いたく驚いたやうで、見開いた目で私を見つめてきた。「心配しないで、サイコキネシスで、ストライクユニットを飛ばすだけの簡単なお仕事だから。それに、機体の強度は折り紙つきよ。」

それこそ、装甲値フル改造って感じね」

「それでも、全然、出来る自信がないんだけど…」

あたふたする恵たん。そこでトムくんは、俯き気味のその頭に左掌を載せ、ゆるゆると撫でて励ます。

「大丈夫、恵ならきつと何とかなるって。ほら、俺も、一緒に戦うからさ」

「トム君、ありがと…」

忽ち、二人だけの世界が構築された。全く、見せつけてくれるわね。私も、彼が此方側にゐたのなら、今すぐ跳んでいつてさういふことをするんだけど……まあ、随分前に諦めたことを、今更蒸し返しても仕方ないか。

「して、明朝の予定は如何に。遺跡の類ならば、息子の和宏かずひろが役に立つであらう。具して行くべし」

二人から目を逸らすやうにして、大佐が述べる。

あいつの能力は、自動走査オートスキャンだったな。触れた物を通してアカシックレコードに接続、情報を得るって代物だ。その気になれば、そらあたしにも出来ないでもないが、本職がいるに越したことはないと思っぜ

理世がさういふなら、連れて行かない訳にはいかないわね。とすると

「〇九〇〇から、作業を始めようと考えています。御息は、その少し前に迎えに上がりますね」

「承知。間に合ふやうに、起こしておかむ。では、やうやう、転送室へ参らうか」

## 富士山頂 富士神大社殿

私達は、帝の居城から、神の御膝元へと身を移してゐた。火口を覆ふやうにして建つ、荘厳たる木造建築。これが、私の仕へる地球の最高神、富士山神様の社よ。ほんの一週間程前に彼神かのじよの神力に

よつて創出されたもので、『何もない所から一瞬にして現れた』と、世間では未だに大騒ぎしてゐるみたいね。

内部は、関係者以外立ち入り禁止。階段を上がると、扉の結界が解除され、ひとりでに開いて私達を招き入れる。照明の類はなく真つ暗だけど、それも束の間、部屋中が凝縮された星明りで満たされた。そして、最奥に、彼女が御姿を顕す。

夜空の紺碧と無数の光点とをさながら映した髪を頭の両脇で8の字に結び、真中の一房を後ろに撫で付けた残りの前髪が山を象どつてつてゐる。額には、彼神の源流たる日輪を髣髴とさせる、円形の鏡。身に纏ふのは、ゆつたりとした一繋ぎの紅白衣。細い眉の下、様々に悟りを啓いた末の全てを見透かすやうな眼差しは、いつ向き合つても私の身体の芯をゾクゾクさせてくれるわ。

「こんな時間に顔を出すとは珍しいですね、理生、理世。勉と恵も。何か、事態が動いたのですか」

富士山様が取り纏められるのは、あくまで地球上・内の数多の神々だけ。私達人間やその他の生物には滅多に干渉なさらない。今回は日本の領域外でミサイルを無効化したこともあつて、宮城内部で行われた立体映像会談で受けた宣戦なんか、ご承知になる由がないのよ。そこで、天皇陛下と富士山様の双方と面識のある私が、仲介役を買つて出てゐる訳。

「ええ、その通りです。争覇の嵐が、今まさに吹き荒れんとしています」

「戦　成程、ここ最近覚えてゐた大気の不穏が所以は、それだったのですね……」

恵さんの言葉に、富士山様は、哀しげに目を伏せ給ふ。そして、数秒の間さうなさつた後、きりりとお顔を上げられた。

「詳細を聞かせてくれますか？」

「ああ、そいつならレポートに纏めといたんで、受け取つて下さい」  
理世が、頭の上の光輪を外し、奉る。彼神はそれを受け、自らの頭上にお浮かびあそばす。理世は、富士山様から授かつた力により、

輪を使ふことで任意の情報を与へられるのよ。

「今回は、連中の動きがどうにもこうにも不審でして……。何らかの手段で以て、本土に危害を加えようとしてくる可能性もあるんです。最悪の事態を避ける為、恐縮ですが、全国の神々の協力を得られるように取り計らっては戴けませんか？」

トムくんが請願する間、彼女は目を閉じて何やら思ほすご様子だった。彼の言葉が終はるなり、軽く頷き瞼を開かれる。

「分かりました、布告しておきませう。しかし、過度な期待は禁物ですよ？ 神には、気難しい性格の者が本当に多いのですから」

「これはあくまで保険のようなもの。なので、その辺りは御気になさらず。日本の平和と世界の次元上昇を成す為に、私達は全力を尽くす所存です」

「頼もしいですね、理生。それでは、人間社会は任せましたよ。その代り、神霊社会からの後方支援には、妾も尽力させて貰ひます」

「ご協力、感謝します。……ところで、一つお聞きしたいことがありますのですが」

ここで私は、気になつてみた案件について、伺ひを立てることにした。

「はい、何でせうか」

「青森県、大石神金字塔に秘められた古代兵器を回収せよとの命を、天皇陛下からお受けしました。それに関して、お心当りはありませんか？」

陛下から賜つた地図を取り出し、場所を指し示す。

「デユリアゲーゼのことですね。約五千年前の争乱では、葦原の中つ国が防衛に、大きく貢献してくれました。少々臍曲がりな所はありますが、根は真面目な人だつたと記憶してゐます」

「人、ですか？」

恵たんが、意外さうな声を上げる。この様子だと、神剣とかビーム砲とかを想定してゐたみたいね。

「ええ。厳密には、人間とは呼べないかも知れませんが……それで

も、彼女は紛れもなく、あなた達と同じ魂を持った存在です。さう、案ずることはありませんよ」

「承知しました。では、私達は、これにて失礼させて頂きます」

私は、いつもの様に家の霊と通信し、帰る仕度を整へやうとするのだが、そこで、トムくんが声を上げた。

「ちよつと待つて下さい。五千年前つて仰いましたよね？ とすると、話の流れ的に、その戦いのすぐ後に封印されたことになる訳で……そんな大過去のことを、どうして陛下の友人がご存知だったんでしょう？」

彼神は、一瞬何か思ひ当つたご様子ではあつたものの、それも束の間、首を左右に振り給ふ。

「はて、それは妾には分かりかねます。もし仮に知つてゐたとしても、<sup>あまじし</sup>章仁がわざわざ伏せたことを、妾が暴くなどはすべきでないでせう」

「詮索は身の為にならない、つてことですか。確かに、世の中、知っていることが却つて仇になるような事態も、割とありますからね。分かりました。ここは、素直に陛下の御意向に従うことにします」

彼は、くい、とメガポジを直し、失敗したなといふ表情で言つた。「よろしい。その調子で精進するのですよ」

「……では、改めて、失礼します」

一段落した風なので、今度こそドローンの構へを作る。すると、理世が脇から口を出した。

「連絡用に、あつしの分神を残しときます」

「何かある時は、こつちに話して下さい」

現れた人形サイズの理世は、高い声で言ふ。いつもの逞しさもいけれど、この可愛さも捨て難いわね。

「分かりました。それでは、くれぐれも日本を……地球を頼みましたよ」

「……はいつー」「」「」

三たび最敬礼した私達は、その流れで、私の家へと転移した。

地底都市ツクヨミ 自宅・理生自室

恵たん達と別れ、部屋に戻った私は、ベッドを召喚し、そこに仰向けに倒れ込む。片方の手の甲で視界を覆ひ、緊張で加速したハートの鼓動を少しでも軽減しやうと、長いスパンの深呼吸をする。

(ねえあなた……私、上手くやれるかしら……?)

理世にはない、この場どころかこの世界にすら存在しない人間に対して零す、私の本音。本来なら、心の海の底に消えてゆくしかないその言葉だけど、意識の中には、確かな輪郭を持った返事が響いてくる。

「勿論だよ。理生なら、どんなに高いハードルでも、ぶち壊して進んで行けるって」

(これまでは、そうだったかも知れないわ。でも、今回ばかりは、本当に自信がないの……。ああ、どうしようあなた、私、すごく怖い……)

辛い気持ちから逃れる為、両腕でぎゅ、と身体を抱き締め、少しでも物質宇宙に占める私の存在の割合を小さくしやうとしてしまふ。「本格的に世界を動かすに当たって、その責任の重さを改めて実感、押し潰されそうになった、か。私にはそんな力はないけど、その心境は分からないでもないよ。今だって、理生の気持ち、霊を通じてよく伝わってきてるから……」

彼は、私の抱へる問題を指摘し、共感を示してくれる。二人の愛の為せる業か、それとも、小説を書く上で培ったスキルの賜物か。そこは分からないけれど、私の胸は、強かにときめいた。

「大丈夫。何も心配要らないよ、理生。そっちの世界は、私の暮らす腐界ディストリアと比べれば、随分かマシなコンディションなんだからさ。それに、もししくじったとして、地球のアセンション自体は成立する。究極的に言えば、その後の地球の扱いが微妙に変わるだけだ。ハル



マゲドンによってでしか目覚められないなら、それは地球人の自業自得。人々の為を思って行動した理生を、責むる連中なんていやしないって」

（あなた、ありがとう……）

私は、己を抱く力をより強め、彼を求めて唇を突き出す。しかし、物欲しげなそれは、虚しく宙を彷徨ふに留まった。それでも、行為は止めない。止められない。

（好きよ、あなた……好き、愛してる……）

「私もだよ、理生。胸のチャクラから、愛しさが幾らでも溢れて来て、今にどうにかなっちゃいそうだ……」

私達は、拙い言葉で、切羽詰った感情をぶつけ合ふ。普通の若い男女なら、行動や仕草で足りない部分を補へるのでせうけど、生憎私達にはそれが出来ない。二人の間には、だうにもならない壁があるのよ。

（んっ……あなた……もう、ダメなの……我慢、できないっ……！

あなた、あなたあなたっ！ 私のここ、穴が開いたみたいで……切なくて、欲しくて、たまらないの……。お願い、抱いて……私の隙間を埋めて……めちゃくちゃにしてっ……！）

「うっつ、理生……そんな風に言われると、私の方までそういう気分になって来ちゃうよ……。ああ……これ以上の想いは辛くなるよ分かっているのに、それでも、もう理生のことしか考えられない！」

心は、いつだつて繋がつてゐる。片時も離れず、常に想ひを確かめ合へる。　　だけど、肌を重ね、互ひの温もりを感じることもだけ

は出来ない。極めて近く、限りなく遠い、そんな生殺しの恋愛関係。人間の本质は魂、ひいては霊だ。さういふレベルで交はつてゐるのだから、私達は、真実の愛といふものを実現してゐるのでせう。

……でも、何か物足りない。人間として生きる為に、精神を肉体に依拠する必要があるからよ。その楔から解き放たれなければ　　つまり、死ななければ、満足のいく交渉は得られないの。それぞれ生まれ持った役割があるし、自殺にはペナルティがあるしで、結局、

出来るのは自分を慰めること位。

(あつ……く、ふ、うん……や、きゃ、ああつ、あなた……)

弱い所を、親の敵とばかりに苛め抜く。室内に響き始めたいやらしい水音が、彼から流れ来る愛の奔流と合はさり、異様な興奮を生ずる。脳髓が、焼け付くやうに熱くなる。

傍に理世があることなどすっかり忘れ、私は独り、快樂の中にまどろんでいった。

\*\*\*

同日 ○二時三五分(日本時間)

反地球 ヤハウエ 地球『解放』連合・秘密軍事施設 戦艦ドック

「やあ、エディさん。ご機嫌は如何ですかな」

よく通る声に、全身に補助脳を括りつけた女・トマス「アルバ」エヂソンは、作業を止めて振り返る。そこに立つ男が誰かを悟るなり、周囲に満ちてみた張りつめた空気が、一瞬にして弛緩した。

「コーメイ! なんだなんだ、久しぶりじゃないか、おい! いつ、こっちに?」

「ついで、先程ですよ。向こうでの策が、上手い具合に功を奏しましてね。そこで、次の作戦に必要な兵装を取りに来たのです」

彼の者の名は諸葛亮<sup>しよかつりやう</sup>、字は孔明<sup>あきま</sup>。全てを見透かすやうな理知的な眼差しと、両嘴角と顎の三か所から伸ばした髭が印象的だ。橙色のスーツに緑のネクタイをびしりと決めた、すらりとした長身の男である。

「策士・孔明の本領発揮って奴かい? いやはや、痺れるねえ。

つと、いうことは、あれだな。アタイのこの、アーリマンの

出番な訳だ！」

孔明は、彼女の指し示す方を振り仰ぐ。果たしてそこには、鈍色に塗り込められた、全長一〇？クラスの構造物が並んでゐた。角ばった異様なデザインは、人間の深い所に訴へかけ、本能的な不安を煽るものだ。彼らのある地点からは見えないが、船底と甲板には、地球連合BASCCの記章がプリントされてゐる。

「これが、此度の戦で使用する、戦術航宙船ですか。成程。こうして間近で見ると、書類上の数値からでは掴みかねる圧迫感といいますか、そういうものがよく実感できますね」

「だろ？ それを狙いなんだよ。生憎、広域回路破壊電磁場無効化装置並びに衝撃濾過障壁相殺場生成装置の開発が追いつかなくてね。艦載設備を整えて、装甲着せて、各種ステルスシステムと大出力レーザー砲を積み込むぐらいのことしか出来なかつたからさ。要は、苦し紛れの誤魔化しだな、恥ずかしいんだが」

発明女王は、軽く頬を赤らめ、明後日の方を向いて言ふ。追つて、孔明がフォローの言葉を掛けむとするが、それより先に、彼の背後から、拍手と共に高らかな声が響いた。

「イーやいや、結構結構！ 今回の作戦の目的は、あくまで偵察！ 顔見せ！ 威嚇ウ！ 我等が、バリアを破り、直々に本土に上陸する必要はなアーいだから！」

この、やけに芝居がかつた調子の男は、サン＝ジェルマンと名乗つてゐる。白い髪を中世のカツラよろしくセットし、臙脂と白の貴族風衣装に身を包み、緋色のマントを翻す。それはそれは胡散臭いみてくれなのだが、何故か、言ふほどの違和感を生ぜない。そこが、錬金術師ジェルマンの恐るべき所だ。

「相変わらずだな、ジェルマン。それに おんや、アレスタまで来たのかい」

「左様でございますですわ。アタクシも、明朝の作戦への参加を予定しておりますので」

伯爵の左三〇度後方には、一人の女が控へてゐた。その名を、ア

レイスター「クロウリーといふ。漆黒のローブに映える金髪、その後ろ髪を結はへ、蠟で螺旋状に固めてゐる。青と赤の瞳の円がそのまま見える程に目を開き、挑発するかのやうな笑みを貼り付けた顔は、まさしく狂気の魔女と呼ばれるに相応しい迫力だ。

「わアーれらの手に掛れば！ 神様気取りで君臨し、他国を押さえ付けて悦に入る小生意気なジャップ共に、目に物見せるなどはたア―易いこと！ 革命し、地球をあるべき姿に戻すのオーだア―！」

「アタクシは、神をも降す大魔導師。日本だろうが何だろうが、すぐに平伏させてやりましてよ」

「フフ、それなら私は、神をも躍らす戦術士とでも名乗りましょうか。たかが島国一つ、恐るに足りません」

後から来た三人が、続けざまに意気込みを口にする。それを受けたエヂソンは、意外さうな表情を作り、策士の方を向いた。

「コーメイ、アンタも行くのかね？ てつきり、安全圏で見物しつつ、指示を加えてくモンだと思つてたが」

「何分、初陣ですからね。生身で行つて、向こうの力量を見定めて来ようと考えています」

さうして、持つてゐた毛氈をば、と拡げ、にやりと笑ふ。

「何、エディさんの アーリマン に乗っている限り、生命の危険はありませんよ」

「フン、幾ら褒めたつて、性能は向上しやしないよ。さつきも言った通り、こいつは未完成なんだ。……仕方ない、アタイもついてつてやるかね。この艦について一番良く知っているアタイが操艦すりゃ、少しはマシになんだろう。もしかすると、ついでに、バリア対策のヒントが掴めるかも分からないしな」

「『汝の意志する所を行え。それこそ 法の全てとならん』  
好きにしゃがるといいですわ」

アレイスターが言ひ終へると同時に、辺りに拍手の音が響く。その主は、サン「ジェルマンだ。

「大いによろしい！ ダーウィンの作品の搬入を終えたらばア、

三隻を以て速やかにヤハウエーを発アーつ！ その後三手に別れ、ステルスを用い、それぞれアメリカ、ソビエト、チャイナに向かわれたしいー！ その先の作戦行動はアー、コウメイの用意したプランに従うのだ！」

頷き合つた四人はそれぞれ片手を掲げ、指先を合はせて、空中に四角錐を描き出す。そのまま、一字一句違はぬ言葉が、彼らの口から発せられる。

「「「「我がが、創造主のために！」「「「「」

## 序章 『開戦（ブレイクアウト）』 （後書き）

想定外、といふ言葉は便利である。

それを唱ふれば、大抵のことは責任を免れると思ひ込む輩もゐるほどに。

だが、所詮は言ひ訳に過ぎず、それが事態に何の進展も齎さぬことを、諸賢はよくご存知だらう。

泣けど喚けど、奴らはこの地にやつて来るのだから。

次回 『インカーシオン来襲』

悠久の時を超えて、輝きの戦士が蘇る。

**第一章 『来襲（インカーシオン）・前』（前書き）**

遂に、第四次世界大戦が幕を開ける……

## 第一章『来襲（インカーシオン）・前』

皇紀二六六九年 文月二五日（土） 一〇時二四分

日本天皇御國 心皇都 松代区 大型集合住宅 真玄莊まぐろさう 一五

〇七号

列島中が、浮足立つてゐた。

何せ、朝起きてテレビを点ければ、そこでは異国の皇帝や大統領が高言を並べ立ててをり、新聞を開けば、『我が国、宣戦布告さる』の見出しがでかどかと踊つてゐたのだ。文字通り、寝耳に水の開戦である。

レスポンスは多種多様。徹底抗戦を唱ふる者、慎重な対応をと警鐘を鳴らす者、金儲けの機会と見て策を巡らす者……等々。兎にも角にも、人々の心は揺れ動き、皇國社会全体に相応の混乱を生ぜさせてゐた。しかし、中には例外も存在する。

私立鋭明学院高等部第一学年の生徒・來傳洸らいでんあきらは、世間の流れから取り残さるるやうにして眠つてゐた。

体格は、同年代の男子の中では小柄で、且つ華奢な方か。黒い髪は見た目以上にさらさらしてをり、長時間床に就いてゐるにも関はず、右後頭部にほんの少し寝癖があるのみである。細い眉の下、固く閉じられた目の縁からは長い睫毛が伸びてをり、一瞥しただけでは少女とも間違へかねない顔貌だ。

寢室に響く目覚まし時計や携帯通信端末のアラームも、しきりに打ち鳴らさるる呼び鈴も、彼の前では全く効果が見られない。さうかうしてゐる内に、ピンポンの感覚が狭くなり、終ひにはダンダンと玄関の扉を叩く音にスイッチする。

『こらー、洗！ 中にいるってことは、ちゃあんと分かつてるのよ！？ むー、早く出てこないと、私の方にも考えがあるんだから！

』！



近所迷惑になりさうな高い声が、何枚もの壁を抜け、洗の転がる所まで届く。だけれども、彼は一向に覚醒する気配がない。業を煮やした訪問者は、合鍵を用ゐて扉を開け、バタバタと足音を立てて家に侵入した。そして、がば、と部屋の扉を開け放ち、それと同時に彼の名を叫ぶ。

「洗あーっ!!」

憤つて眉根を寄する少女の前で、当の洗は、布団にくるまりすやすやと寢息を立ててゐた。彼女は、拳に力を込めながらも、先づは耳障りな目覚まし達を止め、満を持して彼に向き直る。だがそこで、寢坊助の口から気を引く言葉が零れ落ち、その進撃を阻む。

「……ハル……今日も……一段とエ……むにゃ……かわい……へへっ」

「やだ、洗ったら、ひよっとして私の夢」

「……あはは……ハルミさあ〜ん」

彼の脳天に、拳骨を二つに合はせたハンマーが振り下ろされた。少女の名前は畦穂遥<sup>あしほのほのか</sup>。彼女もまた、鋭明学院高等部の生徒で、早い話が洗の幼馴染である。身の丈は洗とほぼ変はず、体型にも特筆すべき所はない。髪は濃いクリーム色で、肩の辺りまで伸ばしたものが、白い肌に纏はりつく形になつてゐる。目元はぱつちりくつきりとして、覗く大きな瞳は、透明感のある金色だ。黒のレースをあしらつた薄紫の半袖に、灰色のフレアスカートを合はせた、静かめの服装に身を包んでゐる。

「痛つてて……ん、ハルカ? もう、勝手に入つて来ないで欲しいって、いつも言つてるじゃない」

「洗が寢坊するのが悪いんですよ。毎朝しつかり起きて、ごはんも食べられてたなら、無理に押し入ったりはしないわよ。さ、さつさと着替えて、私の家に来る!」

彼の眉間を人差し指で突いた遥は、そんな言葉を残して立ち去つて行く。洗は、大きく欠伸をすると、頭に出来たたんこぶをさする手を放し、代わりに流れ出た涙を拭つた。その流れで、時計を見遣

る。

「一〇時四〇分、か。……そういや今日は、ダイモやハルミさんと一緒に、川下りに行く約束だったんだっけ。集合は駅前に九時だったから、すっぽかしちゃったことになるなあ」

そこまで思ひ出した洗だつたが、少しして、違和感に気付く。

「あれ。それなら、もっと早くにハルカが起こしに来ても良いはずだよな？ ……まあ、いつか。早く着替えて、ハルカん家にご飯食べに行こう」

伸びをした彼は、軽く首を捻ると、箆笥の方へと歩みを進めた。

## 真玄荘 一五〇八号

勝手知りたる何とやら。洗は、呼び鈴も押さずに、畦穂家のドアノブを捻る。

「お邪魔します」

「挨拶はいいから、早く上がって上がって。折角温め直したのに、ぐずぐずしているとまた冷めるわよ？」

「分かった、すぐ行くよ」

適当に返事した彼は、脱いだ靴を揃へ、リビングへと向かった。

卓の上には、既に一人分の朝食が用意されており、遙はといふと、居間の壁に貼られた大型ディスプレイに携行PCの画面と音声とを出力し、何らかの操作を行つてゐる。両親はもう仕事に出たらしく、今の家人は彼女一人だ。

「とつとと食べちゃって。状況を確認したら、すぐ出掛けるんだから」

「うん。じゃ、いただきまーす。……ところでハルカ、その川下りのことなんだけど、遅れちゃって大丈夫だったの？」

椅子に腰を降ろした洗は、大根の煮物を箸で裂きつつ、遙に問いを向けた。

「はあ？ 何、暢気に寝惚けたこと言ってるのよ、洗 って、本

当に寝てたんだし、知らないのかもしれないか。取り敢えず、これ見て。分かりの良いところ集めて、一つの動画にまとめといたから」  
彼女の操作で、画面上で映像ファイルが再生され始む。

先づ、何かの会場のやうな場所が映し出され、米英ソ中と一つの見慣れぬ旗が掲げられたその壇に、一人の男が上がってくる。初老の白人男性で、黒いスーツに赤のネクタイを締め、浮かべた表情はいやに険しい。

「この人、名前何だっけ。アメリカの大統領だつてことは、何となく覚えてるけど」

洸は、著の先で空中に円を描きながら、記憶を掘り起こさむと試みる。三十年来続いてきた鎖国体制の影響で、人々の外の世界に対する関心は、極めて薄いものがあるのだ。

「ジョージ・フセイン・ジャックソン。アメリカ初のユダヤ人大統領つてことで、結構有名よ?」

「と、言われてもね。そんなこと知つてたつて、この日本では何の意味もないでしょ」

「それが、そうも言つてられない事態になつてきたみたいなのよね。そいつの言葉を、注意して聞いてみて」

洸が意識をそちらに戻すと、大統領は、流暢な日本語での会見を始めてゐた。

「世界は、既に高い水準で平均化され、最早、嘗て我らを苦しめた飢餓や貧困といった問題は存在しないに等しい。国際社会の情勢も、これ極めて安定している。多く地球市民の求むる所である、世界の恒久的平和の完成も、今や間近に迫つていると言えるだろう」  
「ふーん、良かったじゃない。それで、それが僕達にどう関係するの?」

「いいから、黙つて聞いてなさいよ」

「……だが、我々の前には、一つの大きな障害が残されている。そう、ジャパンだ。彼の国は、第二次大戦において、連合国及びイタリア、ナチスドイツを降し、解放した旧植民地国に対して援助を行

うことで、今日の世界の構築に貢献した。その点に関しては、正当に評価しよう。しかし、その後の日本の行動は、はっきり言って目に余るものではなかったか。不当な人種差別と大量虐殺を行ったドイツとイタリアを、これといった制裁も加えずに保護国とし、優先的な技術提供をして、何食わぬ顔で先進国の一角に復帰せしめた。それだけではない。我らアメリカ、ソビエトの宇宙開発を嘲笑うかのように宇宙船を飛ばし、太陽系惑星資源の独占体制を敷くといった無法に加え、我が国の領土コリア半島にブラックホール爆弾を撃ち込み消滅させたことについては、遺憾などという言葉では到底表現できるものではない。一九七五年、我等はこれに抗議の声を上げた。ところが、日本はこれを認めず、突入した戦争では我等の戦力を完膚なきまでに奪い、その後あらゆる国家との関係を断ったのだ。以後も彼の国は軍備の増強を続け、我等は、いつ攻撃を受け滅ぼされるかといった恐怖と隣り合わせの生活を余儀なくされてきた。そんな状態で、満足な発展など適うものではない。安定した今日の世界において、日本の存在は、人類の躍進を妨げているのだ！ これ以上、日本に勝手を許してはならない！！

そこで、我々アメリカ合衆国、ソビエト共和国連邦、中華帝国、大英帝国は、地球連合BASCを樹立し、彼らの武力解除を求めてゆくことを決定した。連合への参加を、我々は強制しない。だが、諸君らの中に、少しでも平和を愛する心があるのなら、是非とも手を貸して頂きたい。誰も、枕元に巨大な不発弾を置いて眠りたいなどとは、思わないのだから』

演説が終はると、会場に、割れむばかりに拍手の音が溢れ返る。

流は、遙が動画を一時停止して以降も、暫くは、ポカンとした表情で画面の中の外国人を見つめてゐた。

「何言つてんの、こいつ……」

「要は『日本邪魔だからぶっ潰すわ』ってことね。この映像は、日本時間で今日未明、アメリカから発せられたものよ。分かり易さからこれを選んだけど、

ソ連書記長に中帝、英帝からも、同様の声明が出されてるわ。もう、ネットを通じて、世界中に広まってるみたい」

「僕が寝てる間に、何だかんでもないことになってたんだなあ」  
冷めた味噌汁を呷った彼は、溜息と共にげんなりとした言葉を吐く。

「ちよつとちよつと、事の重大さ、分かつてる？ 下手すれば、私達の将来にも関わってくる問題かも分かんないのよ？ ちなみに、まだ動画は終わってないわ。ちゃんと見ないと、承知しないんだから」

遙は、アジの開きに興味の対象を移しかけてゐた洸の注意を喚起し、再生ボタンを押す。

映像が切り替はり、簡素なセットの報道番組が始まった。ニウスキャスターの緑髪の女性は、その筋では割と有名な人物で、どんな時も落ち着いた口調で報道することで知られてゐる。しかし、今回は、どこかそわそわとした雰囲気纏つてゐるやうだ。

「本日〇時三〇分。米アラスカ基地、露ウラジヴォストーク基地、中ペキン基地より、それぞれ三六機の戦術核ミサイルが、我が国に向けて発射されました。軍は、一〇八機全ての迎撃に成功し、直接的被害は皆無であると発表しています。このミサイルは、二〇ギガトン分の熱核融合式弾頭を搭載したもので、仮に起爆すれば、計算上は、一機で西京都府全域を更地にする程の威力を発揮するとされる恐るべきものです。この件に関して、天皇陛下は三国に対して説明をご要求されましたが、どの政府からも、返答は得られていません。先の国々に大英帝国を加えた四国は、数時間前に地球連合なる組織の建設を宣言し、その際我が国政府に対し宣戦布告ともとれる発言を繰り返していたことから、國會はこれを戦争開始の合図と見做し、阿武隈<sup>あぶくま</sup>総理大臣によって国家非常事態宣言が発令されました。天皇陛下はこれを承認され、現在、皆神山要塞内で要人を集めた緊急会議が行われている模様です」

ここで、再び遙が一時停止措置を取った。そして、雑穀米をかき

込む洗に向き直り、顔を近づけて問ふ。

「ここまで見てきて、何か、質問はある？」

「核ミサイルって、何だっけ」

あまりに初歩的な質問に、彼女はあんぐりと口を開く。

「洗のばかつ！ 熱核融合兵器って言えば、人間が編み出した中でも、かなり性質の悪い部類に入る兵器よ？ ウランやプルトニウムといった、重く不安定で核分裂を起こしやすい物質を起爆剤にして、水素なんかをプラズマ化、核融合を起こさせて更に大きな破壊力を生み出す訳。反応のきつかけとなる物質や生成物は、人体に入った場合強い放射線で細胞のデオキシリボ核酸を破壊するから、爆発の衝撃でそれが拡散すると、迂闊に人が普通に住めない土地が出来上がるの」

「そんなヤバい物、よく安全に対処出来るね」

「我が国には特定物質崩壊砲っていう武器があつて、それを使えば、放射性物質をピンポイントで消滅させられるわ。原理は国家機密だからで明かされていないんだけど、ただ、かなりの大出力が必要とされるみたいで、そのの皆神山要塞にしか置かれてないって話なのよね」

遙は、窓から見える、国家中枢を平手で示す。表向きは緑に覆われた標高六五九mの双峰山であるが、その下には超剛金エンパロイザーの装甲板が幾重にも施され、更に奥には広大な地下施設が広がつてゐる。

「なら、あそこが落とされれば、日本は核に対して打つ手がないってこと？」

「あの中には天皇陛下がおわすから、そうなった場合、崩壊砲の有無に関わらず負けが決まったようなものよ。でも、単純に対抗手段だけを見るなら、一概にそうとも限らないわね。全日本エネルギーフィルディングバリアシステムとか、広範囲サーキットディスプレイクティヴエレクトロマグネティックネットとかもあるから、別にあそこでなくとも核兵器の迎撃自体はなの」

「へえー。よく、考えてあるんだね」

少年は感心したやうに頷くが、少女は、その頭を軽くはたいて咎めた。

「当たり前よ！ こうした鉄壁の守りがあるからこそ、私達は、今まで安穩と暮らして来れたんだから！」

「……でもさ、バスクの人たちは、それに怒って戦争を仕掛けてきたんだよね？」

その発言に、遙は、参つたわとばかりに首を振る。

「あのね、洸。国際政治の場で、誰が好きこのんで本音を言うと思ふ？ 世界の平和の為なんて、どうせ嘘っぱち。体面を保つための方便に決まってるじゃない。あいつらは、ただ単に日本がいると世界支配の野望が叶わないってことで、一時的に手を組んで、寄って集って排除しようとしてるだけなのよ。この後は、そこら辺が分かる様に編集してあるから、頭働かせて見なさいね」

彼女は元ゐた位置に戻り、ポケコンへと手を伸ばす。しかし、その動作は洸によつて中断せられた。

「待って、ハルカ。さっき、核融合が危ないって言ってたよね。確か学院にも、『核融合炉』っていう場所があつたと思うんだけど、あれは大丈夫なの？」

私立鋭明学院は、幼小中高大院一貫校であり、その規模に負けず劣らず、消費電力もまた馬鹿にならない。それを補ふべく、都の許可を受け、自前の原子力施設を保有してゐるのだ。

「あれは常温核融合炉だから、全然心配要らないわよ」

「常温？ 普通の核融合とどう違うの？」

「さっきも言つたけど、核分裂によつて熱エネルギーを生み出し、原子がプラズマ化した状態で核同士を融合させ、大きなエネルギーを得るのが熱核融合。こっちは、反応の起点として核物質が必要だったり、冷却の問題もあつたりで、色々扱いが難しいの。対して常温核融合は、常温の状態で極小のブラックホールを発生、その重力で原子を引き付けて、核を融合させる方法よ。有害物質も余計な熱も発生しないから、原子力発電の主流はこっちな」

遙は、今時小学生でも知ってるわよ、と呆れ気味に付け加へる。だがしかし、洗は、未だに腑に落ちないといふ雰囲気の間を向けた。「ブラックホールなんて、使って平気なの？ さっきのアメリカ人、ブラックホール爆弾で領土がなくなっただって言ってたよね？」

「それも心配ないわ。さっきも言った通り、用いるのはごく小さなブラックホールで、高重力によって原子核同士が衝突するに足る速度と軌道とを生み出したら、すぐに崩壊するようなレベルのものだから。放出されるガンマ線とかも、極めて少ないの。それと大統領の発言だけど、わが国では、半島消滅の件は、アメリカが日本から秘密裏に持ち出した設計図を基にブラックホール機関を建造、稼働に失敗して暴走したってことになってるわね。現場は圧縮されて跡形もなくなっちゃったから、真相は今や事象の地平線の向こうよ」「ふーん、そうなんだ。やっぱりハルカは物知りだね」

光さへも逃れられぬ高重力場とかけて、上手いこと言ったと思つた遙であつたが、彼は、それが冗句であることにすら気づいてゐない模様である。それで機嫌を損ねたのか、彼女は腕を組み、そつぽを向いてしまふ。

「洗が不勉強過ぎるのよ。その調子だと、核融合でエネルギーが生じる仕組みも、分かってないんでしょ？」

「うん」

寧ろ、清々しいといへる程の即答であつた。遙はがくりと肩を落とし、やれやれとばかりに頭を抱へる。

「知らないなら知らないなりに、せめて、何らかの仮説を捻り出す位の努力はして欲しかったわ……。仕方ないから説明するわよ、全く。そもそも、原子核は陽子と中性子で構成されているんだけど、どうしてそういう風になると思う？」

「どうしてって言われても……そういう決まりになってるからなんじゃないの？」

またも投げ遣りな答へに、インスタント教師は眉根を寄せたものの、それ以上とやかく言ふことは諦め、やんわりとした苦言を呈す



だけにした。

「それは、あくまで結果論。陽子と中性子との間には、核力っていう、互いに強く引き合う作用があるのよ。中間子ってのが媒介してるんだけど、洗に解説しても無駄そうだから、今日はパス。まあ、とにかくそんな具合で、バラバラにならずに済んでいる訳」

「でもそれだと、分子が作れないよね。原子同士が近づいたら、すぐに核がくっついちゃう」

「そうよね。でも、実際には分子は存在している。そこは上手く出来ているもので、陽子が正の電荷を持っているお蔭で、クーロン力っていう斥力、つまり磁石の同じ極同士みたいに反発する力が働くから、安易にくっついったりは出来ないのよ。ここまで、問題ないわよね?」

うーんと唸りつつ、洗は出てきた情報を整理せむとする。彼の頭脳もそれなりに目覚めてきたやうで、十秒程度のCPUブーストの後、一つの疑問が転び出た。

「あのさ、はね返す力があるなら、逆に、世界は水素ばかりになっちゃわない?」

「良い所に気付いたわね。実際、宇宙に存在する物質の殆どは、水素だって言われてるわ。水素は目に見えないから、普段生活する上ではそんなに存在を感じられないんだけど。それでも、私達の周りには原子量の多い原子って、宇宙全体から見ればかなりの少数派なのよ」

科学に疎い少年は、驚愕して部屋のあちこちを見回し、やがて、思ひ出したやうに幼馴染へと視線を戻す。

「へえ、全然知らなかった……。じゃあさ、その少数派は、どうやって作られたの?」

「そこで、原子核融合の出番ってこと。クーロン力によって、簡単に核が融合することは防がれてるんだけど、何らかの作用である程度まで核同士が近づくと、核力がクーロン力を上回る様になるの。核力の方が勝ってるから、抵抗を受けながらも最後には核融合が起

こつて、反発するのと引き付けるのに使われてたエネルギーは行き場を無くし、外部に発散される。これが、核融合によってエネルギーが発生する仕組みね」

「何らかの作用って、つまりどんな作用？」

「主に重力、万有引力よ。重力は、全ての素粒子に備わった、他の粒子や場を引き付ける力なの。素粒子一つ一つの持つ重力は弱いものだけど、多くの粒子が集まれば、重力場同士が干渉し合って、ある一点に収束するようになるわ。その結果、時速約一六〇〇？もの高速で自転する地球から遠心力や慣性で放り出されないように引き止めておく程の強い力が生み出されるんだから、甘く見ては駄目ね」

さう言ふと、遙は空になつた食器の片付けを始めた。温くなつた麦茶のグラスを手に、洸は彼女の言はむとする所を察しやうとしたが、つひに分からず、洗い場から戻るなりすぐに声を掛く。

「重力がすごいってのは、何となく分かったけど……それが、一体、核融合とどう関係するの？」

「重力は、物質が集まれば集まる程強いものになるのよ。宇宙の中で水素が濃い部分があった場合、それらの重力は一点に収束してゆく。中心にいくほど重力は強くなるから、水素同士の感覚も狭くなるわ。だから、温度も上がる。そして、遂に重力がクーロン力に打ち勝って、核力により原子核同士が融合。ヘリウムの完成って訳ね。陽子が二つに増えたから、斥力も強まって、そこでそれ以上の反応はないの。そんな感じでもっと沢山の水素が集まると、ヘリウムがリチウム、ベリリウムとなつてゆく。結果、宇宙塵や小天体が出来て、それが衝突を繰り返して惑星や恒星になるのです。めでたしめでたし」

一仕事終へた達成感からか、遙はいい笑顔でセルフ拍手。空気を讀んだ洸もそれに続く。ひとしきり手を打ち鳴らした後、彼女は、ソファへと凭れかかった。

「ありがとう、ハルカ。何だか、賢くなつた気がするよ」

「そりゃあ、良かったわ。あー、でも、予想以上に体力使っちゃっ

たわね……。それに、結構重い話したから喉も乾いたかも。ちよつと、お茶注いでくれる？」

「分かった。つとと、はいこれ」

遙は、新たに麦茶が注がれた洗のグラスを、何の気兼ねもなく受け取り、一息に飲み干す。

「ん、んく……。ぷは。じゃあ、頭を宇宙から地球の政治問題に戻してくわよ。覚悟して……って、え？」

卓の上にコップを戻さむとした所で、不意に彼女の声が途切れる。洗がグラスを持つてゐないことに、やうやく気が付いたのだ。

「ちよつと洗、こ、これ！ これえ！」

「うん？ どうかしたの？ ハルカ」

彼の態度は至つて平然としてをり、それが、遙の羞恥心をますます増進せしめた。どんどん頬が赤くなり、口調もたどたどしいものになつてゆく。ここまでされては、洗と雖も、流石に看過は出来ぬ。「何だか顔色がおかしいけど はっ、まさか、誰かに毒でも盛られたとか?!」

「ちっ、ちちち、違わいわっ！」

「じゃあ、どうしてそんな赤くなつてるの？」

「それは、その……か、かんせつ……キ……つたから……」

遙は、顔を俯き、もごもごとした声を発す。理由は推して知るべし。断片的な情報を元に、まさにそれを試みた洗は、大して意味を考へもせず、思ひついたことを口走る。

「関節、極まつたから？」

「なんでそうなるのよ、このトーヘンボク！ 大体、洗はいつもいつも、私の気持ちる」

と、察しの悪さが彼女の日頃の鬱憤に火を着けた所で、唐突にチャイムが鳴らされた。

「誰か、来たみたいだね。ハルカ具合悪そうだから、代わりに僕が出て来るよ」

洗は、返事を聞かず、インターホンの確認もせずに戸口へと駆け

てゆく。とり残され、肩透かしを食らった形の遙は、虚空に向け、一人「こんなのじゃ、晴美さんに敵わないよね……」と呟くのであった。

一方の玄関。洗が扉を開くと、そこには、身の丈六尺の筋肉質な男性が立つてゐた。暑苦しい空気を纏った来客は、右手を上げ、気さくな調子で挨拶する。

「よう、洗。もしかして、いい感じにお楽しみのを邪魔しちまつたか？」

「あれ、ダイモじゃない。どうして、ハルカの家なんか？」

下卑た冗談を軽くスルーし、洗は意外さうに質問を向けた。

客の名は竜崎大莫<sup>りゅうせきだいもく</sup>。洗や遙と同じく、鋭明学院高等部普通科第一学年の生徒だ。もつさり系の、赤茶けた天然パーマントウエーブがかかった髪で、反り返つたもみあげが印象的である。強い意志の感ぜられる角度の急な眉に、ほんの少し垂れた眼。素肌に羽織つたノースリーブのジャケットと、口元に覗く白い歯が、漢の風格を演出してゐる。

「畦穂から聞いてないのか？ 川下りは中止。桐谷には連絡がつかなかったから、三人で探しに行こうつてことにしてたんだ。ついでに、有事の場合必要になる避難用品を物色するとも話してたな」

「ハルミさんが行方不明って、本当？」

洗は、その部分に過剰に反応した。彼が桐谷晴美<sup>はるみ</sup>に惚れてゐる事実を知る大莫は、その勢ひを殺して受ける。

「そこまでは言っていないさ。大方、何かの事情で忙しくて、コンピュータを起動していないとかだろう。親が軍の関係者だと言っていたしな。もし仮に何かあったとしても、べらぼうに強い桐谷なら、心配はないはずだ。……それで結局、俺が来るまで、お前らは一体何してたんだ？」

「ごはん食べながら、大統領の演説聞いたり、核融合の話したりって感じ」

大莫はそれを聞くにつけ、尋ねた俺がバカだった、と顔を顰めた  
り。

「何とも色気がないというか、それ以上に重く苦しい話題だな。ま  
あ、この状況では仕方ないか」

「まだ、政治方面の話があるって言った。いつまでもここで立ち  
話しててもあれだから、上がってよ」

洗は、遥のあるリビングを指し示す。

「おう、悪い。そいじゃ、邪魔するぜ　って、そいじゃここは、  
お前の家じゃなかったな」

「それもそうだね」

「この際だ。お前ら、いい加減一緒に暮らしたらどうだ？」

脱いだ靴を揃へながら、大莫は、夕飯の献立を提案するやうな気  
軽さで言ふ。

「何言ってるの、ダイモつてば。いくら幼馴染でも、付き合っても  
いないのに、一緒の家に住める訳ないよ」

この返答も慣れたもので、大莫は完全に呆れきつた風に、洗へと  
白けた視線を送る。

「いつも思うが、お前それ、本気で言ってるのか？　お前と畦穂を  
見て、付き合っていないなんて言う奴は、世界に十人もいないと俺は  
断言できるぜ」

「そう見えたって、実際何も無いんだから。それより、さ、早く行  
こう」

「やれやれ、お前の話を聞いてると、妬けるなんてものじゃないな。  
その幸運、少し位分けてくれよ……」

目を食ひ縛り漢泣きする大莫。洗は、彼の襟首を掴み、リビング  
へと引き摺って行つた。

僅かもせず、二人は居間に至る。洗が去つてより二・三分は経  
過してゐる筈のだが、その状況は、何ら動きを見せてゐなかつ  
た。即ち、畦穂遥は相変はず頬を染めたままで、先と同じ場所に、

洗のグラスを胸に抱いて立ち尽くしてゐたのだ。

「おい、洗。お前、畦穂に何したんだ？」

彼らの侵入に気付いた様子の無い遥を見て、大莫は、洗に小声で囁きかける。

「別に。ハルカがお茶ちょうだいつて言うから注いであげたら、よく分からないけど、ああなっただよ」

「成る程読めたぜ。つまり、原因は間接キスって訳だ。お前もお前だが、畦穂も畦穂で問題だな……。と、まあ、そういうことから、早く何とかしてやれ」

察した彼は、少女の悩みの種を、乱暴に背中を叩いて押し出した。しかし、当の洗はといふと、大莫を振り返り、提案に文句を垂れる。「何とかするって、どうすりゃいいの」

「んなことは、自分で考え いや、分かった。三つ選択肢をやるから、その中から選べ。一、正面から手を握って、告白する。二、後ろから肩に手を回して、告白する。三、抱き上げて布団まで運び、告白する」

「うーん、じゃあ、一かな……」

一番又ルイ選択につまらんと舌を打つ友人を尻目に、彼は、てくてくと遥の許へと歩いてゆく。そして彼女に向き直ると、胸に置かれたコツプを握る指を、優しく包み込んだ。そこまでされれば、さしもの遥も彼に気付き、かあ、と更に顔を紅くする。

「ちよ、あ、洗?!」

露骨に取り乱した様子の彼女。その瞳を真直ぐ見詰め、洗は、思はせぶりな台詞を吐く。

「ねえ、ハルカ。僕、前から、言いたくて言えてなかったことがあるんだ」

「え？ そ、そそそれって ま、待って！ まだ、心の準備が……」

さう言つて呼吸を整へると、下唇を軽く噛み、俯き加減に彼を見つめ返す。ただならぬ反応に、洗も、覚悟を極むるやうにして唾を

飲み下した。それから、徐に口を開く。

「あのさ……麦茶に砂糖入れるの、止めにしない？」

室内を、静寂が支配した。

洸は、内心ドキドキしながらも、反論に備へて平静を装ふ。遙は、鳩が重力式豆加速砲を目の当たりにしたかのやうに、目をぱちくりとさせる。大莫は、駄目だこいつ、と彼等から目を背けた。

「……………それだけ？」

「もつと言つていいの？　じゃあ、緑茶に生クリーム入れるのと、スイカに練乳かけると、ついでに味噌汁にナスとカボチャ入れるのも、出来れば止めて欲しいな」

抜け抜けとほざく。期待を見事に裏切られた彼女は、わなわなと肩を震はせ、拳句に彼の頬をしかと打つた。

「最ツツツ低！！！」

洸は、それ程の怒りを買ふとは露とも思はざりける故、狐につままれたかの如くに立ち竦む。

「ご、ごめん。そんなに拘つてるとは、思わなかったから……………」

「ちよつと黙つてなさい！」

背後に般若の面が見え隠れする形相に、堪らず洸は口を噤み、直立不動の姿勢をとつた。恋の修羅は、最後にじとりとした視線を送ると、当初の目的を思ひ出し、ディスプレイに接続した携帯コンピュータの元へと進路を定め　そこで、初めて大莫の存在を認識する。「……………さっきの来客は、竜崎君だったのね。予定より早かったじゃないの」

「あ、ああ。前に、ランニングで洸の家に来た時に、かかった時間を元に、到着時間を算出したからな。どうやら俺も、昔に比べて、少しは成長したらしい」

空調の行き届いた室内にも関はらず、彼は、額に汗を浮かべつつ応ふ。それは、単純に彼女の剣幕に怖気づいたからなのであるが、精神の冷え切つた遙は、そこから別の真実を邪推したり。

「そう。……………何か、顔色が悪いわね。ひよつとして、洸にこうする

ように吹き込んだの、竜崎君？」

「うぐ、違うと言えば嘘になるが……ご、誤解するなよ、畦穂？」

俺は、純粹にお前達のことを思ってたな？ 告白しろとは言ったが、まさか、食いものの趣味について告白するなんざ

」

「然るべき制裁が必要ね」

ぴしやりと言ひ放つた彼女は、間髪入れず、大莫の鳩尾に正拳突きを叩き込んだ。屈強に見える男は、いとも簡単に膝を落とし、その後二発三発と浴びせられる中段突きに、ただ喘ぐばかりである。

「今度、こんなことしてみなさい。その時は……分かってるわよね？」

「あ、ありがとうございますッ！！」

耳元での身も凍りつくやうな声に、大莫は、素つ頓狂な叫び声を上げた。そこで、遙は振り返り、何事もなかった風に、満面の笑顔でして言葉を発す。

「さ、洗。続きをしよ」

「うん、ハルカ……」

歯切れの悪い彼の態度は都合よく無視し、彼女は、動画の再生ボタンを押した。

今度の物は、厳密に分類すれば動画ではなく、BGM入りスライドシヨウのやうな体である。『地球連合BASCに対する各国政府の反応』と題され、日本天皇御國：抗戦に始まり、その他主要な国々がリストアップされてゐた。

「ドイツ王国、ローマニイタリア皇國、フランス共和国は黙殺。コ  
ンゴ、アルジェリア、オーストラリア、ブラジル等の先進国は、軒  
並み保留。以下、ほぼ全ての独立国家が、現時点では審議中ないし乃至中  
立の姿勢を示してるわ。唯一遺憾の意を示したのが、インド首長国  
連邦ね」

「何で、インドだけ？」

首を傾ぐ洗。その疑問に答へるのは、腹を押さへ、痛みの余韻に浸つてゐた大莫である。



「地球連合、正式名称は『Global Union; Breackthrough the Ancient Strategy of Countries』。BASICは、標語みたいなもんだな。知つての通り、ブリテン、アメリカ、ソビエト、チャイナの頭文字が由来なんだが……これ、少し惜しいと思わないか？」

「どの辺りが？」

「もつと良く考えなさいよ。インドのイニシャルはI。これを加えることで、BASIC 根本原理とか、王道とかの意味を持つ単語になるわ。つまり、インドは当初、連合参加を持ちかけられてたつてこと」

遙は、止めてみた画面を再び動かし始めた。

暫し残りの表が写された後、映像が切り替はり、濃い黄色のサリ―を巻いた、三十代前半くらゐの女が一人登場する。ミッコガンチー、インド中央政府の外務大臣だ。

『私達は、地球連合に迎合するつもりはない。日本天皇御國は、眠れる獅子である。だが、こちらが何か過ちを犯さぬ限り、彼の国は如何なる動きも見せぬだろう。連合国の目的は、目下最大の勢力である日本を排除し、地球の覇権を巡り存分に争える環境を整えることにある。その先に待つのは、平和などではない。支配だ。私達は、その痛みを、イギリス帝国の植民地時代を通し、よく知っている。』

諸賢、ゆめ騙さること勿れ。耳に心地の良い言葉に踊らされ、事の本質を見誤るべきではない』

「と、まあ、インドの言い分はこんな感じよ」

遙は、洗に熱視線を送る。だが、特に何も起こらない。彼は、極平坦に質問を投げたり。

「じゃあ、日本の味方ってことで良いの？」

「ところがぎつちゃん、そう簡単にもいかねえ。下手に構えれば痛い目を見るつてのは、連合に対しても言えることだ。残念ながら、あのネーチャン達は、いちゃもん止まりだな」

大莫は両手を上げ、大袈裟に肩を竦めた。役にも立たぬ遺憾の意

を突きつくることしか出来ない国際社会の現状に、呆れる所が大きいのだらう。

「でもさ、連合国って、そんなに強かったっけ。確かみんな、第二次第三次世界大戦では、日本に瞬殺されたって話だよな？」

「当時、わが国の技術力は、他国を大幅に引き離れたものだったから……。でも、前回の戦争から、三十四年もの時間が経過してるし、追いつかれてないという絶対の保証もないのよ」

「何より、仕掛けて来たって時点で、相応の勝算なり、秘策なりを持っていてるってこった。『地球』連合を提唱したのは、手前達の行動の正当化と、あとは、米ソ英支で足りなかった場合の保険の為だろうな」

「結局、日本はどうなるの？」

洸の質問に、二人は沈黙す。その後、ややあつて、遙が徐に口を開く。

「現時点では、何とも言えないわ。向こうに話し合う気が全くないことは分かってるけど、焦って攻勢に出れば、世界がBASC側に傾かないとも限らないし、『秘密兵器』で返り討ちに遭う危険性も拭いきれない。かといって手をこまねいては、向こうに先手で裏を掻かれることも予想される。『連合に加入すれば甘い汁を吸える』と判断させるような、デモンストレーションが良い例ね。それをやられると、殆ど惑星一個を相手にしなければならぬ状況に陥ってしまう。つまり、押すも留まるも、リスクが付く物ってこと。そして事態がどう動くかは、政府、ひいては天皇陛下のご英断次第よ」

「そうなんだ。……分かんないなら、講義はこれで終わりってことだよな？ さ、早く、ハルミさんを捜しに行こうよ！」

すく、と洸が立ち上がり、残り二人は彼に白い目を向ける。

「お前、本当に事態を理解出来たんだろうな？」

「お上に任せとけば、僕達がすることは、特にないんでしょ？ 大丈夫、イケるイケる！」

「こんな時まで、能天気なんだから。……確かにそうかも知れないけれど、それにしても、万一の時の備えは必要よ！ あくまで噂の範疇を出ないけど、こういうのもあったりするし……」

ディスプレイが、一面、仄かな青に染められる。

素人がビデオカメラで撮影したものらしく、盛大に画面がブレたかと思へば、途中何かの異分子を拾ひ、それを認識した内部コンピウタが自動で望遠、追跡、焦点を合はせ、暗い紫の飛行物体の全容が、克明に写し出された。先鋭且つ攻撃的なデザインで、例へるならば、六本指の悪魔の手首から先を切り落とし、空に浮かべたやうな風情だ。

撮影者やその関係者のあからさまな動揺が窺へる声の中、物体は悠々と高速飛行を続ける。だが、突如として急速旋回を行ひ、機体を四五度傾けて上昇を始めた。何かとズームアウトすれば、その後を、皇國空軍の戦闘機が追つてゐるではないか。空軍機は何らかの攻撃を行ふが、効果は見られない。次に、ミサイルが二発射出されたが、これは、物体から放たれた光学兵器により、途中で撃破されるこれを受けた空軍機は、対抗する様に光線を放ち、対象に命中、中破させた。再び光が照射されると、飛行物体は爆発し、墜落を始む。映像は、そこで途切れてしまふ。

「何これ？」

「明らかにUFO、だよな……？ ど、どうということなんだ畦穂！」

メールで送り付けられた動画には含まれてゐなかつた情報故か、妙に大莫の食ひ付きが良い。対して遙は、詳細が不明瞭な情報を取り扱ふのは気が乗らない、とでも言ふ感じで、渋りながら発言す。

「これは、今年睦月に、台湾県で撮影された物らしいわ。目撃者がかなり多くて、情報の信頼度も高いみたい。この件に関して軍に電凸した人の曰くは、国籍不明機を撃墜しただけだと返されたそうよ」「国籍不明機、って言われてもなあ。そもそも、地球のものかどうかすら怪しく見えるんだが」

彼の指摘に、少女は大きく溜息を吐く。

「嘆かわしいことに、竜崎君みたいなことを考える人は結構いるみたいで、宇宙人の襲来から新種の無機生物説、アスカ文明の遺産まで、様々な流言飛語が駆け巡ってるの。信じたくはないけど、この飛行物体は、二六六六年水無月以降世界中到る所で目撃されてるってことだから、どれも一概には否定できないのよ。とりわけアスカ文明の遺産には、アルジェリアのオリエンタル遺跡という前例もあることだし……。で、その中に、米ソが極秘開発した新型兵器っていう説があったから、もしかしたらと思っただけだよ」

「宇宙人だ！ 宇宙人に違いねえ！」

「相対性理論が曲がらない限り、肉体を持った地球外知的有機生命体が地球に来ることは、物理的にまず有り得ないわ。それに、居住可能惑星に生物が発生、恒星間航行を可能とする程の超高度文明を形成する段階まで進化する確率を考えたら　ハッ」

コスモス推しの大莫について、ソファの上で鼻で笑ふ遙。そこに、教へて厨の魔の手が及ぶ。

「この映像、台湾県で撮られたんだよね。台湾のどこら辺なの？」

「丁度、中華帝国との国境付近だった筈よ。領空侵犯ってことで、合法的に撃墜したのね」

「でも、それっておかしくない？　だって、日本に入ると、外国の機械は使えなくなるんでしょ？」

日本天皇御國の周囲には、常にある種のバリアが張られてゐる。広範囲回路破壊電磁網と呼ばれるそれは、排他的経済水域の縁の装置より展開され、特殊な処置を施してゐない電子回路を使ひ物にならなくするといふ効果を持つものだ。これを突破する方法は諸外国には明かされてをらず、鎖国政策の柱の一つを為す。それが抜けられたとなれば、一大事と呼ぶに相応しい。

「そういう所も含めて、胸騒ぎがしたからこそ、こうして持ってきたのよ。眉唾ではあっても、用心するに越したことはないもの」

起立した遙は、首を回し、大画面に繋げた携帯PCを回収す。そ

れをポケットに収め、羽根付き帽子を被り、手提げ鞆を持つと、出入口の方へと歩を進める。

「じゃあ、そろそろ出るわよ」

「うん、ハルカ」「おっしや、絶対にUFOを見つけてやるぜ！」  
男二人は、従順な子犬の如くに、その後続いた。

\*\*\*

一一時三一分

皆神山要塞 大本営・作戦指令室

連絡を受けて集ひたる、それぞれ空陸海軍の指揮を任された三名の総司令官、そして帝は、苦い表情でモニターを見つめおはした。

映像は、福島、石川、島根沖の海上より中継されてゐるものだ。孰れの画面にも、ダークグレーの飛行物体が写し込まれてゐる。それは、多くの直方体によつて構成されてをり、ひどく殺伐とした雰囲気纏ふと共に、ヤマアラシのやうに砲を着込み、何者をも近づけまいとするプレッシャーをこれでもかとはかりに放つ。

「一体どういうことだね、これは！」

空軍総司令・麻生巖仁あすひつひは、我に返るなり、憤然たる面持ちで空軍の通信士を問ひ詰めた。通信士は、青ざめた顔から結露したかのやうに汗を流しつつも、それに応ふ。

「じよ、上下部に見られる旗章より判断するに、連合の空中母艦と思われませう。全長一〇？超、速度約六〇〇？毎時……現在、どの機も速度を緩めつつ、当要塞から約二〇〇？の地点を、高度四〇？を保つて飛行中。このまま進むと、二八分後の一二〇〇に、この上空に集結することが予想されています」

彼は、報告に目を円くせり。そして、すぐに、部下の怠慢を咎め

に回る。

「何たる失態だ！ 何故、これ程までの接近を許した？！ 哨戒機は、居眠りでもしていたのか！？」

「いえ、それが……予測された捕捉以前の軌道を含む空域を飛行していた哨戒機からは、如何なる異常も報告されていないのです。監視衛星にも反応はなく、発見者の中には、何も無い空間から突如として出現したと証言する者もおり……。尚、敵艦と見られる飛行物体は、各種索敵装置に一切映らず、現在もまた、目視のみで観測を行っている状況です」

「馬鹿な、有り得ん！ わが軍の機器が欺かれるなどと」

そこで、陸軍総司令官であり、最年長でもある立石源左右りふさくげんさうが、狼狽うづへる巖仁の肩を掴む。

「麻生君、そこまでしておきなされ。何分、小生らに残された時間は、ごく少ないものぞ」

ぐう、と黙り込んだ所を見て、源左右は、海軍総司令・大和屋耀やまとや子こに視線を向けた。同じく取り乱し掛けてみた彼女は、数瞬目を閉じた後、眼鏡を押さへて海軍通信士に問ふ。

「電磁網は、正常に動作していて？」

「はい。動作に異常は見られません」

「よろしい。では、大至急、全日本衝撃濾過障壁生成装置を起動しなさい」

「了解しました」

オペレーターは、即座に各部署へと通達す。そこで巖仁は、空軍全機に、予定バリア域内への帰還を命じた。耀子も、それに続く。

件の障壁は、外部からの一定量以上のエネルギーを遮断するものであり、戦闘機等がこれに高速で衝突した場合、破損の恐れがあるのだ。

やがて、先の海軍通信兵が、衝撃濾過障壁についての報告を行ふ。「閣下、機構の起動に成功しました。障壁の最大展開までは、四分程度かかる見通しです」

それを受けた源左右は、蓄へた顎鬚を撫で付け、うづむと唸る。  
「予定到着時刻での出力は、正味六割か。心許ないのう……。よし、では、この要塞の障壁も展開せい」

「既に、手配は済んでおります。十分後には、最大展開が可能です」  
「うむ、大儀じゃ」

と、陸軍総司令が部下を褒めた所で、最上部に坐す天つ皇が、彼に更なる指示を下し給ふ。

「念には、念を入れておきましょう。源左右君、市街の格納もお願いできますか？」

「……畏まりました、陛下。大至急、手配致しましょう」

敬礼した源左右は、柄にもなく緊張した面持ちで、数名の兵に指示を与へてゆく。心皇都の成立以来一度も使用されたことのないシステムを起動するのだから、その恐縮も無理からぬことだらう。

源左右がしつかり動いてゐることを確認なされると、天皇陛下は、誰にともなく呼び掛けられる。

「それと、誰か手の空いている方は、先方との交信を試みて下さい」

「はっ、では、自分が！」

直ちに、自主性の高い通信士が名乗りを上げ、巨大な幽霊へと電波を投げ始めた。帝は一度目を瞑られ、呼吸を落ち着け給ふと、再びモニターの中の金属塊を御覧ず。

「悪い予感が、現実にならねば良いのですが……」

\*\*\*

一一時三五分

松代区 大手百貨店 しろかね屋 地上一〇階

「これと、これと……あと、これも要るかしら？」

ちよつと洗、

ぼさつと立ってないで、ちゃんと付いてきなさいよ。買う物、カ―トに入れられないじゃない」

遙は、陳列物を眺めてゐた洗に歩み寄ると、手押し車に防災用品を放り込む。その物量を目の当たりにして、彼の表情は、七夕の夜の空模様の如くに晴れない。

「ねえハルカ、本当に、こんなに必要なの？ 僕には、無駄遣いしてるようにしか思えないんだけど……」

「甘いわよ、洗。どんなに節約しても、死んじゃったら元も子もないわ。それに、これには洗の分も入ってるんだから、文句は言いつこなし」

彼女は説くが、洗の顔面には、より濃い戸惑ひの色が浮かぶ。

「僕、今月お金ないよ？ バイト代も、家賃と通信費に消えちゃったし……」

「ばか、これ位私が払うわよ。洗が苦学生だつてこと、この私が知らないはずないでしょ」

「うん……何だか、いつもごめんね、ハルカ」

彼は、伏せ目がちに遙を見、似合はぬ詫びを口にする。だが、それを受けた彼女は、口を尖らせ、少年の額を中指で軽く弾く。

「そこ、謝らない！ もう聞き飽きたかも知れないけど、あの件に関して、洗には非なんて全然ないのよ！」

「それは分かつてるつもり。でも、ハルカのお金なんだから、やっぱりハルカ自身の為に使った方が……」

「もー、水臭いわね。幼馴染でしょ、私達は！」

「それ、理由になつてないよね」

適当な言葉で逃げ切らむとした遙なれど、この問題に関しては、洗の思ひ入れも強いやうで、いつもの様に容易に納得したりはしない。しかし、彼女からすれば、本当の理由は伏せて置きたい所。

秘密を守り通すべく、灰色の脳細胞が捻り出した答へは、果たしてごり押しであつた。

「うるさい！ これは、ほんとに私の為なのよ！

ほら、甘い



物食べすぎちゃって太るよりは、金欠で困ってる泷を助けてあげるのが、心身共に健康にいいでしょ？ それに、私、貯金はしない主義なの。消費しないと、経済は回らないものね。だから、どうしても気が収まらないなら、私が事業でコケた時、持ち直すまで泷の稼ぎで食べさせて貰うっていう出世払い（？）方式で、どう？」

「うん。それなら、少しは気が楽かも。……でも、僕、そんなに稼げるようになるかな？」

丸め込まれた彼だったが、間もなく不安の影が差す。彼の中で、金銭は、相応の意味を持つてゐるのだ。

「勉強なら、幾らでも付き合っただけよ。あつ、勉強以外でも、泷がどうしてもって言うなら、って、そうじゃない、何言ってるんだろ、私。……と、とにかく！ 頑張つてよね、私の失業保険」  
最後に出掛けたボロを覆い隠すやうに、遙は、泷の背中を平手で叩く。

「じゃあ、早速明日、宿題見てくれない？ 丁度、バイトは休みだつてメールが入ってたんだ」

思はずして手に入つた好機に、彼女の顔が、ぱあと輝いた。

「ん、任せときなさい！ 絶対、物にしてあげるわね！」

「う、うーん、そんなに気合を入れる必要は、ないんじゃない、かな……？」

一方泷は、地雷を踏んでしまつたか、と愛想笑ひを引き攣らす。

そんな彼の頭に浮かぶは、悪友の暑苦しい顔。かうなれば一蓮托生とばかりに、その口から、鎖の如くなる言葉が飛び出した。

「そうだ、この際だから、ダイヤモンドも呼ぼう！ それに、ハルミさんだって、明日になればきっと連絡つくようになると思うし」

彼女にとつての本旨を外れることになる提案に、遙は拗ねた表情を作る。

「むー、二人つきりの方が、捗ると思うけどね。ところで、その竜崎君は、一体何処行つたのよ？」

大莫は、彼女らと共にしろかね屋に入店したのだが、いつしか二

人から離れてしまつてゐたのだ。ひとしきり辺りを見回した後、洗が、窓辺に佇む彼の姿を発見す。カートを押してそこまで行くが、気付く様子無く、ぼう、と空の彼方を見詰めてゐる。

「ダイモ、まだUFO探してるの？」

「おう。世紀の瞬間は、必ずこの俺が激写してやるぜ！」

彼の手の中には、購入したばかりの撮影機材が収められてゐた。その様を見て、遙は、呆れた溜息を吐く。

「でも、収穫なんてないんでしょ？ 定石的に考えて」

「大宇宙の神秘が、そうそう簡単に見つかつてたまるか。こういうのは、狙つて見ようとする、却つて見つからなくなるモンなんだよ」

「だったら、そうして張り込むのは、無意味なことなんじゃない？」

「本当だ、バカだ！」

凶星を突かれ、ぐむ、と大莫は黙り込んだ。しかし、無駄な不屈の闘志が、すぐに無駄な反論を捻り出す。

「今日はその、あれだ　そう、特異点なんだよ！　実は、数秘術によつて導き出された運命の日で、未だに無益な争いを続ける人類に裁きを下す為に、宇宙人の円盤が大拳して押し寄せて来るんだ！  
「電波妄想乙。至極アホらしいわ。……それで、そのカメラ、一体幾らした訳？」

「三万弱だな。小遣いの殆どが消えたが、我ながら、いい買い物だった！」

「消費するのは止めないけど、どうせならその資金を、もっとマシな方向に注ぎ込みなさいよ……」

遙は、後悔など微塵も感じさせぬ彼の笑顔に、冷やかな言葉と視線とを投げた。

「ダイモは、防災グッズは買わなくて良かったの？」

「ああ。そこら辺は、親父が詳しいからな、家には色々常備されてるんだ。それよか、お前らもまた、随分と買おうとしてるみたいじゃないか」

大莫は、籠に山と積まれた洗達の荷物に、困惑の言葉と視線とを隠せない。

「僕も、多すぎるよって言ったんだけど、ハル力が必要だって言うから……」

「結局、尻に敷かれてんだな、お前は。やっぱこの際、同棲しちまえよ。そうすれば、買う量も少なくて済むだろうぜ」

「どっちにしる二人分なんだから、量は変わらないじゃな あっ  
つつい、正しい指摘を加へてしまふ遙。それが自らの利益には繋がらないと悟つたのは、殆ど言葉を発し終へてからのことであつた。恋する乙女としては、大いに凹まざるを得ない事態である。

「確かに、そうだよな。あーあ、もしハルミさんがいれば、本当に必要な物を教えて貰えたのにな……」

「桐谷か。今頃、どこで何をしてるんだろうな……」

その脇で、男二人は空を仰ぎ、この場にゐない少女へと思ひを馳せてゐた。彼らと彼女、桐谷晴美の出会いについて話すには、約四週間の時を遡らねばならない……

## 第一章『来襲（インカーション）・後』

卍卍卍

水無月二九日（月）　〇八時〇五分

心皇都　松代区　私立鋭明学院　高等部棟一階　一年普通科乙組  
教室

「あー、持ち上がりでいい加減この学校に飽き飽きしている奴も、新入生気分が抜けてダレてきた奴も、よおく聞け。そんなお前らに朗報だ。　実は、今日から、この普通科乙組の生徒が一人増える」

無精髭の担任教師に煽られ、教室内が、ざわさわわと沸き上がる。來傳洸はその限りではなかつたが、それは単に、彼の懇意にしてゐる者が近くにゐないからであり、隣に大莫や甲組の遙が座つてゐたのなら、嬉々として効果音の一部に組み込まれてゐたことだらう。

「桐谷、入つていいぞ」

「失礼します」

音もなく扉が開かれ、頭はになつた編入生の姿に、先頭近くの生徒達から、先づ歓声上がる。彼女が歩き出すと、やがてそれは、全体に広がつた。

少女は、かなり長く伸ばした栗色の髪を、一度後頭部で結はえ、それを折り返して再び結び、毛先を後光の如くに爆発させてゐる。

……だが、それはあくまで、二次的特徴に過ぎない。

（おい、見るよあのムネ！）（あ、ああ。一体、何カップなんだ……？）（腰つきとか、すつごおい……）（どどど、どんな生活したら、あんなプロポーションになれるつてのよ?!）

一際目を引くのが、一四歳といふ年齢に似合はぬ發育を遂げた、

引き締まり且つ豊富な肉体だ。よもや誰も、彼女が年齢を偽つて編入したものとは思ふまじ。

彼女は、教師の横に並び立ち、生徒達に向き合ふと、折り目正しく礼をせり。その際身体の一部があらさまに揺れ動き、再び一堂より歓声や悲鳴が上がる。

「お前ら、浮かれるのはいいが、ちつたあ静かにしろい」

担任が彼らを窘め、その間に、編入生は黒板に名前を書く。

「桐谷晴美です。皆さん、宜しくお願いしますね」

真部勉のマナー講座の賜物か、第一声は、ごくごく凡庸で当たり障りのないものであつた。再び一礼した晴美には、儀礼的な拍手が送られる。

「席は、來傳の隣だ。何か困つたことがあつたら、そいつに聞け。それが嫌だつたら、その委員長だな」

教師が、最後列の洗、続いて最前列に座る水色エビフライヘアのメガネ少女を指差した。委員長と呼ばれた彼女は、眉間に皺を作り、むすつとした表情で中年男性に対応す。

「先生、みだりに人を指差さないで下さい」

「そうは言つても、お前は委員長だろ？ つまり、お前は津和吹麻琉個人である以前に、乙組委員長つう一個の公存在なのさ。物扱いされても文句は言えねえ立場つて訳だ」

「納得がいきません！ 第一、それなら來傳君の件はどう説明を付けられるつもりですか？ 彼には、何の役職も割り振られていないでしょうに」

びし、と洗を指で示す麻琉。どうやら、規律の問題は、マナーに優先するらしい。

「そう言われても、來傳だからとしか言いようがないな……。なあ、來傳も文句ないだろ？」

「どうでもいいですよ。それより、ホームルームの続きをお願いします。ほら、キリヤさん、立ちっ放しで可哀想じゃないですか」

言はれて、彼は思ひ出した様に左を見やる。先程から、睫毛の先

一つ動いてゐない。

「おおっと、そうだったな。桐谷、もう座っていいぞ」  
「はい」

返事した晴美の姿は、次の瞬間には、既にそこから消えてゐた。代はりに、洗のすぐ脇の席から、耳に新しい声が飛んでくる。

「らいでんさん。お心遣い、ありがとうございます」

「え？ う、うん、どういたしまして……」

状況は判然としなかつたものの、取り敢へず彼は、無難に受け応へておく。そのまま晴美は前を向いてしまつたので、それに倣つて、彼も視線を担任に戻す。

教師は、手の甲で暫し目を擦つたれば、首を傾げつつも、朝の会を開始した。

HR後の乙組には、何やら妙な空気が立ち込めてをり、気苦しさから、洗は長い息を吐く。

一度謎の転校生とあれば、机の周りに人だかりが形成されるといふのがお約束だが、現実はさうともいかない。取り分けここ鋭明学院高等部においては、生徒達は幼小中学部からの持ち上がり組と途中入学組に二分されてをり、それぞれで寄合が作られる傾向があるが故、異分子に対する干渉を避くる者が多いのだ。結果として、皆気にはなるものの、動くに動けないといふ状況が容易に完成する。

仕方がないので、洗は、晴美に話し掛けることにした。

「キリヤさん、次の授業科目とか、分かる？」

「すみません、教えて頂けると助かります。それから、私のことは晴美で構いませんよ、らいでんさん」

「分かつたよハルミさん。僕も、アキラでいいからさ。それで、一校時目は数学だよ。緑の小さめの教科書。確か今日は、六〇ページの高次方程式からだつたかな」

彼女は、下ろし立ての鞆をたどたどしい手つきで開け、中から教本とノートと筆記用具を取り出す。

「これですね。わざわざありがとうございます、あきらさん」

「いいのいいの。困った時はお互い様って、いつも言われてるからね。こういう時位、僕も何かしなきゃ」

洸は、その言葉を盾に甲斐甲斐しく世話を焼いてくる、幼馴染の顔を思ひ浮かぶ。実際、今の行為は彼女の本意に明らかに反してゐるのだが、その事実は彼の与り知る所ではない。哀れなるは畦穂遥である。

担任教師は、普段よりも更に短い時間でHRを切り上げてをり、授業開始まではまだ二十分は猶予があつた。ただ座つてゐても暇と見て、洸は、会話の継続を決定する。

「ところで、ハルミさんは、どうしてこんな時期に転校？」

「父上が、こつちに異動になりました。それを機に、一家揃つて引っ越して来たんです」

心皇都は日本天皇御國の首都であるからして、経済の規模が大きく、活動も盛んだ。加へて、皆神山要塞といふ一大拠点の存在もあり、人の入れ替わりが激しいと言へる。従つて、家の都合で転校する者は、割かし多い。その点で、彼は何の違和感も生ぜなかつた。

「へえー。因みに、前の所は、どんな感じだったの？」

「深い、森の中でした。木々の間を駆け巡つて獣を狩つたり、畑を耕したり、結構楽しかったですよ」

洸が思ひ描いたのは、平和で閑静な田園風景である。……だが、実態は、そんな甘いものではない。結界により俗世から隔絶された、半径一〇？の世界。軍の秘密施設として作られた場所だが、そこは、充満した地力の影響で魑魅魍魎達が実体化し、獲物を求めて昼夜間はず闊歩するといふ、魔空間であつた。

「田舎の方の出身なんだ。僕、まだ心皇都を出たことないから、そういう生活にちよつと興味あるんだよね」

「でしたら、その時は、気を付けて下さいね。生半可な気持ちでいると、死にますから」

「そ、そんなに危ないの?!」

「はい。昔、弟のカズ君と一緒に山に行った時、油断から怪異に襲われ、大怪我をさせてしまったんです。慣れない人が山に入ると、それ位の危険があるんですよ」

その出来事は、晴美の胸に深く刻みつけられてゐる。嘗ては、贖ひきれぬ罪の記憶として大いに彼女を苦しめてゐたが、今となつては、手痛い失敗の経験として彼女の人格構築に一役買ふのみだ。

「大変だったんだね。　ああでも、そんな所から来たんなら、心皇都の生活もかなり大変なんじゃない？」

「そうですね。人がすごく多くて、それに動きも制限されますから、窮屈で仕方ないです。あと、こつちに来てから、初めてお金というものに触れたんですが……未だに、どうしていいものかよく分からなくて」

洸は、これでもかとはかりに大口を開けた。高度に文明化されたこの国において、貨幣経済の浸透してゐない土地があることが、信じられなかつたのである。尤も、晴美のゐた所の場合は、少し趣が異なるのだが。

「お金は、マジで大事にした方がいいよ。で、具体的に、どんな所が駄目なの？」

「欲しい物の数値と同じか、それ以上になるようにお金を渡すのは理解しました。でも、同じ様な物なのに場所によつて値が違つていたりして、どういう基準なのが分からず、それで困つてゐるんですよ」

「相場が分からないってことだね。確かに、昨日今日でお金を知つた人には、難しい仕組みかも。　それなら、今度時間がある時、実地で教えてあげるよ」

「わ、ありがとうございますー」

余程切実な悩みだつたのだらう、晴美は、いたく嬉しげに両の手を打つ。その、どこぞの幼馴染には滅多に見られぬ無邪気な仕草は、彼の心を仄かに打つた。

「こ、この位のこと、気にしなくていいよ。それより、他に何か問



題とかは？」

照れ隠しに、洗はまた、質問を投げ掛ける。

「えーと、実は私、これまで、同年代の方と会う機会がほとんどなかったんです。大人の殿方をおもてなしする術なら、よく心得ているんですけど……。接し方は、こんな感じでいいのでしょうか？」

「うん、別段おかしい所はないんじゃないかな。強いて言うなら、敬語を使われると、それで距離を感じちゃう人もいるってこと位だね」

「この言葉遣いは止めた方が良いでしょう。かなり前からこれなので、私としては、このままの方が気が楽なのですが……」

さう返すが、今の口調を続けたい理由はそれではない。彼女はとある理由から、年齢を一つ誤魔化して高等部一年に編入せられた為組の全員が年上なのだ。その状況でフランクに話すことは、晴美には躊躇はれた。

「じゃあ、そのままでもいいんじゃない？ 少なくとも、僕は気にしないよ」

「お気遣い感謝します、あきらさん」

「僕で良かったら、何でも相談に乗るからさ。バイト先の紹介とかなら、力にもなれると思うし」

「そちらは既に当てがあるので、大丈夫です。それよりも……」

彼女は、急に声のトーンを下げ、洗の耳に口を寄す。その際、つい癖で色を乗せてしまひ、彼は赤面した。

「あの、学校という所は、いつもこんな風に、妙な気が漂っているものなんですか？ 今だって、幾つもの殺意が、私達の方に向けられていますし……」

「い、いや、普通に、そんな危険な場所じゃないんだけど」

言ひつつ、少年は辺りの様子を探らむとす。そして、血に飢えた狼共と、目が合った。『カノジヨ持ちにも拘らず、爆乳転校生といちゃつくとは、何とすらやまけしからん……！ おのれ來傳洗、その罪、万死に値する……！』爛々と輝く眼の群れは、そんな負の念を

凝縮して、一点彼へと照射してゐる。

「そ、そうだつ、僕、用事思い出しちゃった！ ハルミさん、話はまた今度ね！ 他の人とも、いっぱい話してみるといいよ！」

洸は、脱兎のごとく駆け出して、一目散に竜崎大莫の元へと向かった。

「助けて大莫、殺される！」

「落ち着け、洸。お前を狙っていた奴らは、殆ど桐谷の方に流れた」  
振り返れば、十名近い男女に囲まれた晴美は、既に彼の視界には入らない状態。どうやら、先の行動が切欠で、膠着が崩れたらしい。洸は、竜崎デスクに寄つ掛り、がくと肩を落としたり。

「はあ。何なんだろううね、みんなして……」

「おっと、気を抜くにはまだ早いぜ？」

大莫は親指を立て、背中越しに出入口を指し示す。扉は締まつてゐたが、そこに嵌められた硝子戸を通じて、槍の様な視線が洸に投げられてゐた。例の幼馴染、遙だ。彼女は、彼が気付いたと知るなり、人差し指の動作で以て彼を呼び寄せる。

「行ってやれ、浮気者」

「だから、僕とハル力はそんな関係じゃないって」

悪友の言葉にケチを付けつつも、洸は遙に近付いて行き、扉を開く。と同時に、腕を絡め捕られ、人気のない場所へと連行された。

#### 一階階段下 用具置き場

「誰？ あの子」

襟首を掴み、蛇も裸足で逃げ出さざるを得ないやうな笑みを浮かべた遙は問ふ。

「うっ……あ、あの子、つて……」

「決まつてるじゃない。さっきまで楽しそうに話してた、あの、素麵力ボチャみたいなおっぱいの子よ」

言葉の節々に、悪意の棘が生えてゐるやうだ。チクチクと責め上

げられ、洸は、途切れ途切れに返す。

「転、校生のつ、ハルミさん、だよ。こっち来た、ばっかです、色々、勝手が、分かんない、みたいで……」

「ふーん。もう、名前で呼んでるんだ？」

腕に更なる力が籠められ、彼の足は、為す術なく地面を離れた。

「そ……それは、ハルミ、さんが、そう、呼んで……」

「まあ、いいけど。まだ『さん』止まりだし。それで、何を話したの？」

「前に、住んでた、とことか……すごい、いなかで、お金、触ったこと、無かつたって、言うから……」

「『だつたら、一緒に買い物に行つて、そこで教えてあげるよ』って訳ね。これだから洸は……」

不意に力が緩められ、ドサ、と彼は地に墜ちたり。緊張と圧迫とで呼吸が制限されてをり、胸を押さへ、ぜえぜえ肩で息をする。

「ねえハルカ、どうしちゃったの？ いつものハルカより、随分乱暴だよ？」

彼女は、苦々しげなる目で洸を一瞥すれば、ふ、と溢れた情動を殺す。そして、手を腰に当て、高圧的に見下ろす形で彼に相對した。

「あの女に近付くのは、止めときなさい」

「どうして？ そんな悪い子には見えなかつたけど……」

「それは、あくまで上っ面だけの話よ。よく分からないけど、あいつは、ヤバイなんて言葉じゃ表せない。一目見ただけで、とんでもない力が伝わってきた……あんなのと関わつたが最後、命が幾つあつても足りないような事態に巻き込まれても不思議はないわ」

今は身を引いてあるものの、遙には、武道の心得がある。恐らく、その関連で習得した何らかの技能が、彼女に危険を悟らせたのだから。無論、晴美を遠ざけむとする理由は、それだけではないのだが。「でも、もう、一緒に買い物に行つて、相場を教える約束しちやつたし……」

「問題なし。破棄しなさい」

「本当に困ってるみたいだから、出来るなら、そういうことはしたくないよ」

洗は、遙の瞳の奥を覗き返し、哀願するやうに言ふ。さながらにらめつこを続けた拳句に、とうとう彼女のスイツチが切り替はり、白い頬を桃色に染め「降参よ」と白旗を揚ぐる。

「仕方ないわね。　但し、その時は私も付き添うし、念のため竜崎君も持っていくから」

「ダイモモ？」

「ええ。もし何かあった時、私一人じゃ、洗を守りきれぬ自信がないもの」

『油断すれば食はれる』。遙の中には、そんな予感が渦巻いてゐた。それがどういふ意味なのかは、各々の想像にお任せしたい。

「そんな、気にし過ぎだと思っけどなあ」

「甘い！　逆に変なこと教えられてからでは、全てが手遅れなのよ。兎も角、洗が何と言おうと、私も一緒に行くんだからね！」

デートなどさせるものか、少女の意志は堅いやうだ。取り立てて反論する気も起きなかつたので、洗は、取り敢へず了承しておいた。「わかつた。じゃあ、お昼にでも、詳しいとこみんなで相談しようか」

一二時〇五分

鋭明学院 食堂

「その身のこなし……桐谷さん、何か武術をやってるんじゃない？　自己紹介が済むなり、遙はカマをかける。晴美は、特に驚いた様子もなく、至つて普通に回答す。

「はい。父上の家に伝わる戦闘術、それから、我流ですけど剣術と槍術を少々」

「伝家の戦闘術？」

怪訝顔で聞き返す。晴美の言ふ戦闘術とは、即ち、狭霧流忍法と

いふ非常に胡散臭い代物である。言へば更に怪しまれることは勿論、父龍祐は抜け忍であり、万が一の里からの報復も考へられる為、他言するなときつく言ひ付けられてゐるのだ。

「すみません、詳細を話してはいけない決まりでして……」

「一子相伝の暗殺拳とか、そんな所か？」

箸で空中をアタタタしつつ、大莫が口を挟む。行儀が悪い。

「いえ、そういう物では、ないと思います。私だけでなく、母上や他の兵隊さん達も、父上の手解きを受けて幾つかの技を習得していますから」

「兵隊、ということはお父様は軍の関係者なのね？」

「はい。僻地の勤務でしたが、一昨日から皆神山要塞に配属になり、そこで働かせて頂いています」

「あのお山に転属だなんて、かなりのエリートなんだね。その家の子供なんだから、道理で、ハルカのセンサーが反応する訳だよ」

洸は、腕を組んでうんうんと頷く。

「それにしても、謎に包まれた伝統武術、か……俺のスピリットが、ガンガンに熱くなって来やがるぜ！ なあ桐谷。俺、ちょいっとばかり空手をやってるんだが、一つ試合してはくれないか？」

「構いませんよ」

晴美は、大莫の提案を快諾した。だがそこに、遥の方から横槍が入る。

「ちょっと竜崎君。そんなこと言って、実は、桐谷さんのカラダが目当てだったりしないでしょうね？」

「な、何をバカなことを！ 俺は、純粋な一学术的興味と、あー、マイノリティーに対する揺るぎ無き愛情と歪み無き判官贔屓の根性からだな」

多少なりとも心にやましい所はあつたやうで、被疑者は、適当な言葉を並べ立てた。それ見たことか、と睨み付けたクレーマーは、視線を隣の被害者Hに移す。

「無理にこんな助兵衛の相手することないわよ。それより、私と戦

つてくれる？」

力量の確認は、遙にしても大いに望む所である。当初は、洸と晴美のデートを阻止しつつそれとなく行ふ予定であったが、思はぬ大義名分を得ることが出来、内心大莫には感謝してゐた。

「いいですけど……私は別に、殿方と身体が触れることに、抵抗はありませんよ？ 慣れてますから」

「あなたが良くても、世間の目がそれを許さないの。そういう訳だから、放課後、第三武道館に来て頂戴」

「……分かりました。だいもさん、何だか申し訳ありません」

有無を言はせぬ雰囲気に、忍者娘は抗議を取り下げ、彼の方へと頭を下ぐ。

「いや、いいのさ。あの『稲光る畦穂』の活躍がまた見られるってんなら、こちらら文句はないからな」

「竜崎君。その呼び方、恥ずかしいから止めてって言ってるわよね？」

「僕はかっこいいと思うけどなあ。『稲光る畦穂』」

「もー、洸までっ！」

男二人を相手に、遙は不満を顔にす。そのやり取りに、新入りは、何事かと首を傾いだ。

「稲光る畦穂って、どういう意味ですか？」

「中学の途中までは、ハルカも空手をやってたんだ。雷みたいに動きが速くて、破壊力も凄かったから、そんな渾名がついたんだよ」

「そうなんですか。確かに、はるかさんからは、結構な気を感じます。今から、手合わせするのが楽しみになって来ました」

「お手柔らかに頼むわね。ところで、桐谷さん。朝洸が、経済について教えるって話してたと思うけど、その時は、私と竜崎君も同伴するってことでいいかしら？」

ここにきて遙が、話を本来の予定軌道上に戻さむとする。

「俺も行くのか？」

寝耳に水なのは大莫だ。彼は、彼女からも洸からも何も聞かされ

てゐなかつたのである。

「何？ まさか、承服しかねるとでも？」

「こ、高体連が近いんだ、そんな風に出掛けたりしている暇はねえんだよ」

圧力に屈しさうになりつつも、何とか意見を表明す。しかし、遙はそれをものともしない。

「却下。竜崎君程度の実力で、試合に出られるなんて思ってるの？ どう考えても、まだ一年は早いわよ」

「そうですね。はるかさんに比べて、だいまさんから感じられる力は、大分弱いです」

初対面の晴美にまで非力を指摘され、洸の同情の眼差しの中、彼は卓上に崩れ落ちた。

「ダイモはいつでもいいとして、じゃあ、土曜日はどうか？ 授業が普通の日より短いし、ちょうどシフトも入ってないんだ」

「私は大丈夫よ。携帯さえあれば、何処でも仕事できるから。桐谷さんは？」

遙に問はれ、晴美は困惑した表情を作る。

「どうでしょうか、父上に聞いてみないことには……」

「軍で働いてるんだったら、迂闊に連絡は出来ないわよね。なら、その所確認しておいて とうか、聞いたらメールで教えてくれる？」

「めえる、ですか。何でしたっけ、それ？」

晴美は、またも困り顔。昨日いきなり父に手渡され、弟より必要最低限にも満たない程度の説明を受けただけであるから、通信装置の使い方などはまるで身に付いてゐないのだ。更に彼女は、午前中の授業に於いて、ろくすつぽ触れたことのない外国語の洗礼を浴びてをり、処理落ちに近い状態にある。細かい知識が抜けてゐたところで、何の不思議もなからむ。

「えっと、ネット上で、手紙をやり取りすることだよ」

「ねっと……すみません、よく分からないです」

しゅんとなる。あまりの情弱さに頭を抱へた遙だったが、観念したやうに息を吐くと、晴美に向き直った。

「いいわ、私が解説してあげる。取り敢えず、携帯出して」

言はれ、彼女はブレザーとブラウスの隙間に指を滑り込ますと、双球の間から通信端末を取り出す。炎色系の、最近流行りの空中投影式で、キーボードを二つ折にしたやうな簡素な形状だ。

「さ、最新モデル　　というか、どうしてそんな場所に仕舞っているのよ……」

「父上から、肌身離さず持っているようにと言われましたので」

「う、うん、一応、単語の意味は合ってるね。でも、そこだと、激しく動いたら壊れちゃいそうだよ」

洸の目線の先では、ラグビーボールを髯髯とさせる二つの塊が、今にもボタンを弾き飛ばさむばかりに存在を主張してゐる。その谷間にかかる圧力とその感触とを想像し、彼の顔は仄かにだらしなく緩んだ。

「大丈夫ですよ。中で激しく動かれたって、私、そう簡単には壊れませんから」

「？」

微妙に、論点がずれてゐた。はて何の事か、と洸が頭を働かせやうとした所で、背後に立つた遙の双手刀が、彼の両肩に降り下るさる。その威力にきうと気を失ひ、少年は、食べ掛けのピロシキに頭から突つ込んだ。

「はるかさん!？」

「桐谷さん、一つだけ言っておくわね。うちの洸に、余計な火遊びを教えないってこと、約束してくれる？」

遙は、晴美の放つ娼女のアウラもまた、敏感に感じ取つてゐた。

「え？　あ、はい。分かりました」

一方のくのいちは、一瞬の戸惑ひを見せたが、すぐに肯定の旨を伝ふ。彼女の発火能力は一般人には隠しておくべきだ、と真部勉を始めとする周辺の人々に言はれてゐたことから、さういふ反応にな



る。

「くれぐれも頼むわよ。それじゃ、ちよつとそれ貸してみてもいいよ。失意で動かなくなつた大莫を余所に、気絶した泷の頭を腿に乗せ、遥は解説を始めたのだつた。」

一六時四八分

鋭明学院 第三武道館

謎の転校生とかの『稲光る畦穂』の勝負と聞いて、全学実戦空手部一同以外にもそれなりに野次馬達が集まつてをり、館内は熱気に満ち満ちてゐる。観衆の見守る中、道着に身を包んだ少女二人は、背中を向け合ひアップを始めてゐた。

「ハルカ、ブランクとか大丈夫なの？」

「仕事の合間に出来るだけ運動するように心掛けてたから、体力的には大方問題ないわ。尤も、技の精度は、多かれ少なかれ落ちてるとは思うけどね」

遥は、ちらりと相手を振り返る。そこでは、晴美が、空中に向けて神速の連続蹴りを放つてゐた。

「どつちにしろ、アレの前では、私の技量なんか関係ないわよ」

「負けると分かつてるのに、戦うの？」

いつものことながら、泷には、幼馴染の心持が解せぬやうだ。

「別に、負けたからといって死ぬでもなし。そんなことにガクブルするよりも、実際に相対して、あれの実力を確かめておきたいのよ」

二人の視線の先で、今度は、原理不明の二段跳躍からのドロップキックが繰り出さる。得体の知れなさに、遥の額を冷たいものが伝つた。そこで、審判役の大莫から声が掛る。

「時間だぜ、二人共。準備はいいか」

双方共に、回れ右して向かひ合ふ。

「時間無制限、ルール無用の三番勝負。勿論、武器の使用は禁止だ

が。相手の背中を先に地面に付けた方を勝者とする。異論はないな？」

両者首を縦に振り、進み出て一礼。間もなく、試合開始が宣言される。

「始め！」

先手必勝、遙は、右手を腰溜めに構へ、雷光の如くに飛び出した。左胸目掛けての、回転力を利用した素早い突きを、晴美は後しざつて躲す。そこに、遙の左後ろ回し蹴り。晴美は左腕で受けたが、同時に、彼女の右肩へと裏拳が叩き込まれる。遙は体重を晴美に預け、また右足を踏み縛つて押し切らむとす。だが、力が足らずに弾き返され、宙返りをして一時後退した。

「お速いですね。ひよっとすると、きらさんより速いかもです」

ざわめきの中で、晴美が、感心したやうに言ふ。

「誰よ、それ？」

「父上のお弟子さんです。一昨日までは一緒でしたけど、今は、千葉にある基地でお仕事されています。とても良い方ですよ。今度、ご紹介しますね」

「それじゃ、楽しみにさせて貰う わっ！！！」

ここで遙は、再び攻勢に出る。閃光の様に接近しつつ、左で足払ひをかけむとすると、向かふは垂直跳躍で逃ぐ。そこで、身体を捻り、用意してゐた右拳で腹を狙ふ。それは掴む形で止められたが、遙は左手で晴美の服を掴み、背負ひ投げを決めた。

「一本！」

この試合において適切かどうかは不明だが、大莫の判定が響く。観衆から、俄かに歓声が上がった。

「中々の使い手のようですね。お見事です」

ばねを使ひ飛び起きた晴美は、笑顔で以て相手の技を褒め称ふ。しかし当の遙は、喜ぶでもなく、寧ろ苦々しい表情でそれに応へり。

「冗談。その台詞は、ちゃんと本気を出してから言つて欲しいわ」

その発言に、周囲がどよどよと揺れ動く。多くは、『稲光る畦穂』

の速攻の前に、転入生は為す術がなかったものばかり捉へてみたのだ。

「ばれちゃいましたか。なるべく、穏便に済ませるつもりだったんですが……」

晴美は、あけらかんと言ふと、軽く目を瞑る。再び瞼が開かれた時、遙は、猛禽に睨まれた時の鼠のやうに、果てしない戦慄を覚えた。

「やっぱり、こういう場合、手加減はいけませんよね。失礼になってしまいます」

体験者の曰く「本気を出した晴美は、父親と同じ目になる」。即ち、細氷の霧に紛れて敵を狩る、冷徹な戦士の如き眼差しが、そこにはあつたのだ。彼女は、薄く唇を歪むと、審判を促す。

「だいもさん。続き、いいですか？」

「は……ハツメツ！」

気圧された大莫が宣言と共に、遙は足に力を込めた。それを解放し、いざ攻撃　と思つた所で、彼女は、標的の姿が見えないことに気付く。右、左、上と眼球を動かし、姿を探さむとしてみると、突如、その視界が天井で埋め尽くせらる。

「一本?!」

驚き交じりの判定を受けても尚、遙は、現状を掴みかねてゐた。

「何、今の……」

「大丈夫、ハルカ？」

動けない彼女を心配して、洸が駆け寄り、覗き込む。差し出された手を取り立ち上がると、遙は、晴美の影を探し始めた。そして、彼に示され、背後にそれを見つく。

「桐谷さん、今、何をしたのよ？」

「背後を取らせて貰いました」

「そんな、いつの間に……」

収入の少なさを嘆く三十代OLのやうに口元を押さへ、大きく目を見開く。

「これで、一対一ですね。次で最後、どうせですから、全力で楽しみましょう？ フッフ……」

さう言ふと、晴美は、同様に呆然としたままの大莫に秋波を送つた。

「ファイナルマッチ、いざ尋常に、尋常に始め！」

二回言ふ程の切実な願ひを込めた開始宣言を機に、遙は気を取り直し、腰を落として攻撃に備ふ。だが晴美は、直ぐに勝負を決むる心算はないらしく、不敵な笑みを浮かべ、型を作る已だ。

睨み合ひが続く。『先に動いた方が負ける』 この場面だけを切り取つて見た者なれば、まさしく、さういふ状況と捉へただらう。しかし、畦穂遙は、先に動かうが動くまいが、勝ち目が無いといふことを悟りきつてゐた。その、進退窮まつた緊張感の中、彼女は奥歯を噛み締むる。

「（でも、ここで萎縮したら、今後ずっと、あの子に負けたままになるに違いない！ そうよ、今は、洗だつて見てるのに　なのに、何もせずに負けるのは、絶対にイヤ！！）」

少女は、横目で、愛しい幼馴染の姿を捉ふ。彼は、先程より少し離れた場所から、固唾を呑んで勝負の行く末を見守つてゐる。

「おや、よそ見していいんですか？」

その間に、晴美は、乳房が触れ合ひさうな距離まで接近してゐた。遙は、咄嗟に左フックを打ち込むが、後退して避けられる。そして、爪先が地に着いた瞬間、晴美はそこに莫大な力を込め　相手の視界から、跡形もなく消え去りぬ。　相手の視

「ま、また……ッ！」

遙は、背後へと、左回し蹴りを放つ。が、それもまた、空振りに終はつた。彼女の心の臓がドキリと跳ぬる。体感時間が何倍にも引き伸ばされ、胸の中を、ごうごうと木枯らしが吹き抜けてゆく。

そこで、はつと気付き、遙は、勢ひの衰へ始めた脚に、再び力を込めた。

ゴッ！　彼女の脹脛はくひはと晴美の臍すねとが、鈍い音を立てて激突す。

「はあああああ……せいつ！」

地に足がついてゐるといふアドバンテージを活かし、遙は、滞空する敵を強引に叩き落とした。晴美は、空中で体を捻ると、右手一本で倒立する形で受け身を取り、後方宙返りを駆使して間合ひを離す。そこに生ずる隙を突かむと、遙は最大戦速で追ふ。

上段蹴り、下段突き、踵落とし、肘鉄、裏拳、蹴り上げ、体当たり、手刀、頭突き……鬼神のやうなる轟撃を、晴美は危なげなく受け、威力を逃がしてゆく。

「数を撃つても、それぞれの質が低くては、例え当たっても意味ありませんよ」

遙は応へず、無秩序な連撃を繋ぐばかりだ。汗一つかいてゐないくノ一は、軽く溜息を吐くと、相手の額をぼんと押し、軽く仰け反らす。

「一発必中、一撃必殺が肝要ですよ。見てて下さいね？」  
『肢し』

『だれやなぎ  
垂夜和』

体勢を持ち直した遙は、間もなくして絶句した。物理的に反撃してくるとばかり思つてゐた晴美が、己に抱き付き、優しく包み込んでゐたからである。更に彼女は、遙の耳元に唇を寄せ、甘い声で囁く。

「大丈夫、痛くしませんよ」

そつと、息を吹きかける。そして遙は、何が何やら分からぬ内に、ふうわりと畳の上に押し倒されてゐた。

「ホオオーウムランツ！」

大莫の魂の雄叫びが木霊し、益荒男手弱女の歡喜の声がそれに続く。

「えっ……………え？」

ぼつ、と覆ひ被さる者の顔を見上げながら、加熱した頭を整理する遙。落ち着く程に、徐々に赤くなり、拳句に、夕焼け空のやうな深紅に染まる。

「私の勝ちですよ、はるかさんっ……………」

「ちょっと！ お、おわ、終わったんなら、早く、どいてくれる？！」

「ええー、いいじゃありませんか。もう少しだけ、このままでいても……？」

「やつ、やめ……胸、重くてつ、苦し……」

晴美の気合は完全に抜けてをり、とろんとした眼で、腕の中の少女の瞳を見詰めてゐる。その道を志す連中からすれば、道着をマイナスと数へたとしても、桃源郷にも等しい光景だ。否、その筋になくとも、心の奥底より湧き上がる物を感じぬ人間は少なからむ。竜崎大莫などは、まさにこの部類に該当する。

「勝者、桐谷晴美！ いやあー、イイ物を見せて頂いた！ すんばらすいつ！ そんな桐谷選手には、敬意を表し、『炎群散らす桐谷』の称号を贈りたく思う。一同、異論はないかー?!」

「……押ッ忍!!」

満場一致で決定し、ここに芽出度く、『炎群散らす桐谷』伝説が幕を開けた。遙にいやいやされて渋々立ち上がった晴美は、忽ち野次馬に取り囲まれ、一躍時の人となる。そこから何とか這ひ出したる敗者は、幼馴染の所に辿り着くと、ハイな周りの皺寄せを喰らつたかのやうに、肺から長い息を絞り出す。

「何なのよ、全くもう……。でもまあ、一応、悪い人ではないみたね。少し変な所があるけど。でも、油断しちゃ駄目よ。兎に角、晴美さんには、出来るだけ近づかないこと。って、聞いているの、洗？」

遙が仰げば、彼の瞳は彼女を捉へてをらず、代りに人垣の方に固定されてゐた。

「ハルミさん、ハルカより強いんだ。『炎群散らす桐谷』、か……ちよつと憧れちゃうな」

「あ、洗?!」

「あれ。ハルカ、そんな所で何してるの？ と、そつだ。僕、バイト行かなきゃだった。じゃあ、ハルカ、また今夜ね!」

「そんな、ね、待つて？ 洸、あきらあーっ！」  
來傳洸は、そそくさと、何の未練もなきが如くに立ち往にてけり。  
後には、失意に暮れる少女の、悶々とした唸り声だけが残された。  
とまあ、このやうな経緯で、彼らは親交を深むるやうになつたのである。

卍卍卍

文月二五日 一時四四分

しろかね屋 地上一二階

ビル内に流るるオサレなBGMが中断され、代はりに、ひどく耳障りな音が響き渡つた。同時に、赤い警告ランプが、其処彼処で回り始む。

「な、何事だ!？」

動転した大莫が、ビデオカメラを取り落す。

「警報、みたいね。でも、こんなの、今まで聞いたことがないわよ

……」

「じゃあ、さつきダイモの言つてた通り、本当にUFOが攻めて来たとか？」

「そんな非常識、ある訳」

遙が言ひかけた所で、アラートの音量が下がり、音声放送が加はつた。

『これより五分後、松代区全域の地下格納を開始します。外を出歩いている方は、速やかに近くの建築物内に避難し、可能な限り地下階に移動するように心掛けて下さい。繰り返します。これより五分後……』

三人共に、出すべき言葉を失ふ。遙は、洸の手を取り下に降りる

階段へ。大莫は、カメラを抱えて上の階を目掛けて走り出す。

「ちよ、ちよつと竜崎君、一体何考えてんのよ!？」

「こんな大袈裟に構えるんだ、相手はUFOに違いねえ! 奴らは空から来る。だから俺は、上の階からコイツを使って激写することを……強いられてんだよ!」

三万円の機材を掲げ、輝く白い歯をガタガタ言はせながら、洗達を振り返つて親指を立てた。

「バカだ! どうしようハルカ、ダイモがバカになっちゃってるよ!」

「馬鹿なのは元々でしょ。それが、突然の事態で動転して、よりおかしくなってるみたいね」

「何をう! 今こうしている内にも! 全世界が! この俺のスクープを! 渴望しているというのにッ!」

まるで聞く耳を持たない。そこで、遙は徐に携帯コンピュータを取り出すと、何やら操作しだす。

「仮にこの上空に巨大な飛行物体が現れたとしても、竜崎君の撮影した映像は、何の役にも立たないわよ」

「どどど、どういことだ睦穂ーッ!」

「簡単なこと。これを見なさい!」

ズン! 突き出された端末の画面には、心皇都の雑多な街並みが映り込んでゐた。

「そ、それは!？」

「皆神山ライブカメラよ。これで、二四時間三六五日、松代区の様子を知ることが出来るわ。皇室のホームページに行けば誰でも見られるんだけど、どうやら、知らなかったみたいね」

遙の口撃が、雷の様に大莫を撃つた。

「ぐッ、そんな仕掛けが用意されていたとはッ! 俺の、完敗、だっぜ……」

燃え尽きて、階段へと座り込む。その顔は、良い夢でも見てゐるかの様に、安らかだ。



「むー、手間掛けさせるわね。芝居がかった口調つても、存外に疲れるのよ」

「別に、そんなことしなくても良かったんじゃないかなあ。ビルごと潜っちゃったら、上まで行っても意味なんかない、って言えば済んだ話だよな」

遙は、目を円くした。洸は、頭の回転が速い方ではないのだが、そんな彼にでも自明の理を見落とすほど、彼女もまた焦燥してゐたといふことを悟つたのである。

「……とにかく、ここから移動しなきゃね。買った者は私が持つから、洸は、竜崎君をお願いできる？ 別に、ここに捨てて行つてもいいんだけど」

「いや、連れてくよ。ダイモには、いつも楽しませて貰ってるからね」

大きな荷物を抱へた二人は、そろそろ人もまばらとなつてきた階段を、速めの歩調で降りていった。

\*\*\*

一二時〇〇分

心皇都・松代区上空

「皆の衆ウー、揃つたようであアーるな！」

戦術航宙爆撃母艦 アーリマン 三番艦のブリッジから、サン＝ジエルマン伯爵が言ひ放つ。

「ああ、予定通りな。どうやら、今の所は無事に動いているようですよ  
一安心だよ」

彼の正面空中に窓が現れ、一番艦のエチソン、それと孔明が映し出された。

「クロウリーの方には、異常はないかね！」

「機体の調子は、まずまずの様子にありましてよ。しかし、アタクシの方は、機関室からの法的波動に当てられて、些か霊調を崩しますの。何とかありませんこと？」

別の画面から、額に手を当てたアレイスターが、小さく呻きながら尋ね返す。

「抗重力機構の維持だけなら、二五%のエンジン出力で可能だ。必要ない時はセーブしておくんだね」

科学者のアドバイスを受くるなり、魔導師は、魔法陣のついた錫杖の先で床を打ち、部下をして機関の出力を低下せしめむとする。だが、そこに、孔明が待ったを掛けた。

「お待ちなさい、クロウリーさん。その前に、一つ、やって頂きたいことがあります」

「何か策を思いついたのかね、コウメイ！」

「その通りですよ、伯爵。街は地下に隠したみたいですが、どうやら、敵の障壁は、まだく不完全な状態にあるようです。この分なら、もしかすると、威嚇射撃のついでに攻撃が通るかも知れません。エディさん」

「艦首の超大型収束レーザーカノンを使いな。あれなら、先の核ミサイルみたいに無効化されるということもない筈だ」

「承知しましたわ。それでは一発ブチ込みまして、目に物見せておやりなさいな！」

魔導師の発破に呼応し、三隻の先端に設へられたカバーが開かれる。

「主砲へと繋がる全エネルギーライン、開放。セイフティデバイス解除。 システム、オールグリーン」

「俯角八四度。目標、敵要塞」

無骨な四角い砲身が迫り出し、三つの砲口が、揃って皆神山要塞を向く。

「カウントダウン開始イー！ 五、四、三、二 主砲、撃てエー

い！！」

一斉に、三本の赫いコヒーレント光が放たれた。それらは一つに融合し、都の上空に展開された障壁に、一時堰き止めらる。だが、圧倒的エネルギーの奔流で以て徐々に篩の穴は広がり、遂には十分な破壊力が見込めるレベルの電磁波が、皆神山バリアにまで至らむとす。ぶつかれば、暫くの間は持ち堪ふことも可能かも分からぬいが、反射されたレーザーにより、周囲に多大な被害が及ぶことは確実だらう。だが、まさにさうならむとした瞬間、彼らのモニター上から、光の線が消え去った。

「あなや、どうしたことでしょう。未だ、照射止めの合図は出してない筈ですが？」

策士は、隣に座る技術者へと視線を送る。彼女は、制御システムの中に入り、点検を行ふ。

「システム異常なし。主砲は、今尚光線を発し続けている。映像を出すぞ」

船底中央から前方を撮影するやう設置されたカメラの映像が、新たに現れた。そして二人は、異様な光景を目の当たりにす。

「馬鹿な、曲がっているだ！？」

レーザーは、発射されてすぐの地点で、あらぬ方向に進路を変へてみた。

「一体、どこに向かっているのです？」

「……南南東だ。衛星カメラによると、約百？先、富士山で途切れているね。そこから発せられた限定高重力場によつて、引き寄せられ、他種のエネルギーに変換されているらしい」

眉根を寄せたエヂソンは、さう言ふなり、速やかに攻撃を中止させる。一方、アレイスターは、悪阻つほうを起した妊婦の様に、前屈みになつて口元を押さへ、苦しげに唸つてみた。

「おい、どうしたんだ、アレスタ！？」

「うっ、ぐう……感じる、感じますわ、神の気配を！」

おお、

アイワシユ、左様でやりましたのね！」

「ほう、君の相棒がアー、何かに気付いたのだねッ！」

「今の現象は、日本の最高神の仕業という話ですわ。主の御意向に背くとは、何と嘆かわしい、不届きな神でありましょう……何としても、このアタクシの手で墮としてやるぜですの！」

吐き気から<sup>まなじり</sup>涙を浮かべ、彼女は、富士山のある方角を睨み付くる。

「ふむ。気持ちは分かりますが、調子が優れぬようですし、またの機会にした方がよいと思います。それよりも、作戦Cを実行に移しましょう」

「了解であるぞ、コウメイ君！　でエーは我は、西京都に向かうとしようー！」

ジェルマンの艦は、西南西に舳先を向け、船尾に備へた推進装置より火を噴いた。

「アタイらの目的地は、東京都だったね。丁度良い、アレスタは、ここでちよつとばかし休んでな」

「そうさせて貰いましたよ……」

一番艦は、エチソンの指示により、南東へと進路をとる。みるみる遠ざかつてゆく二隻を見送ると、魔導師は、虚空に向けて言葉を吐く。

「さて、宴をおつ始めちまいましようか、アイワシユ　親愛なる我が聖守護天使よ」

宜しい。まつろわぬ者共の罪、その血を以て贖わしめん。いざ、聖戦の幕開け也

\*\*\*

一二時〇八分

皆神山要塞　大本営・作戦指令室

指令室は、緊張感に満ち溢れてゐた。

何せ、相手は全長十？にも及ぶ巨大空中戦艦である。仮にそんなものを撃墜すれば、落下物による被害は馬鹿にならないだらう。

衝撃瀘過障壁上に物質が落ちた場合、速度・密度・質量・熱量等のエネルギー合計が基準値より小さければ素通りし、大きければ衝突する。速度が撃力となつて発散された後、失はれたエネルギー量によつては、そこからバリアを通り抜けることもあるのだ。戦艦クルアの大きさなら、先づ通過は不可能な上、回路破壊電磁場によりその先の活動も不可能。だが、破片であれば話は別となる。

結果として、何も出来ぬまま、睨み付くることしか出来ない状態が続いてゐた。

「砲撃が止んだのは良いが、二隻が移動、残り一隻は押し黙つたまま……何か、策はないものか……」

空軍司令巖仁が、齒軋りしつつ呟く。  
「現状では、如何ともし難いのう。あれ程巨大な敵というのは、流石に想定外じゃて」

陸軍の源左右も、かくの如くなる状況では、若干焦りの色を隠せない。

「残骸を市街に落としてはならないのなら、海上などに誘導すればよい話ではありませんか？」

二人の顔色を窺つた耀子空軍司令は、苦し紛れの提案を繰り出した。だが、反応は芳しくない。

「向こうも、こちらが撃てんことはわかつとるじゃろ。むざむざここを離れるとも考えられん。第一、あんな針千本のような船に近付いて誘き出すなんぞ、出来ると思つてか」

「そ、それは……ならば、例の霊子トランスポーターはどうなのです？ 確か、空間を越えて物質を移動出来た筈では？」

「あれは、特定の基地間での物資の運搬や出撃を円滑にする為のもので、それ以外の使用は困難なのだよ。無論、不可能ではないが、

干渉範囲は周囲五？程度……高度四〇？の敵に手を出すことは不可能だな」

「でしたら、残骸を空中で粉々に砕くか、跡形も残らぬ様な兵装を用いる等は」

「それもまた、現実的ではないわい。完全消滅ならブラックホール爆弾を使えば済む話じゃが、奴めらの言い分からして、それは、火に二トログリセリンを注ぐことになりかねん」

それきり、総司令達は沈黙してしまふ。そこで、天皇陛下が御口を開かれた。

「今は、先方が帰ってしまうのを待つ他ないようですね。上空のあれも、きつと、何か目的があつて残留しているのでしょうか。それが済めば、或いは……。ところで、通信は繋がりましたか？」

「いえ、返答は全く御座いません。こちらからの通信を遮断しているものかと」

「そうですね。……申し訳ありませんが、まだ、呼び掛けを続けてみては貰えませんか？」

「はっ、承りました、陛下」

先の通信兵は、敬礼の後、素早くモニターに向き直る。と、同時に、映像の一つに異常を見て取つた。

「お、皇都上空の敵戦艦が、正体不明の物体群を排出！ 数二〇、大きさ一五〇m前後！ 極めて緩慢な動きで、障壁及び電磁網域に向かっています！」

画面上では、紫を帯びた黒い塊が幾つも、ゼリーの中を進むかのやうに落ちてゐる。

「あの材質は、もしま……」

巖仁は、さる案件を思ひ出し、眉間に深い皺を刻む。

空軍のトップたる彼にとつて、領空侵犯といふ問題は、取り分け頭痛の種である。以前であれば、電磁場により、そんなことに悩まされる必要はなかつた。だが、二六六六年の水無月からといふもの、月に一遍は敵対的なアンノウンの目撃報告が上がってくる。そして

その殆どは、今映つてゐる物体のやうな、黒紫の外装を持つてゐた。空軍は数度に渡りそれらと交戦し、辛くも撃墜に成功してゐる。その際、残骸や操縦者の回収に成功してゐるのだが、何処の所屬であるのかといったことは、未だに掴めてゐない。何しろ、機体を構成するのは地球上には存在しない物質で、乗つてゐたのは、人も爬虫類ともつかぬ異形の存在だつたのだ。

さうかうしてゐる内に、事態は変化を見せる。

「物体、速度を落としてつつ障壁に接触　つ、通過しました！　徐々に速度を上げ、落下してきます！」

「何だと！　連中は、異星人と手を組んだとでもいうのか？！」

「今は、それを考えるべき時ではなかる。それよりも、あれが、障壁対策を施したお得意の核爆弾だとするなら、手を打たんと不味いことになる。さつさと崩壊砲を撃たんか！」

源左右の指示により、二つある皆神山の峰の片方が開き、中から青く透き通る結晶塔が伸び出す。即座にその先端から光が閃き、投下された物体達を薙いだ。

「全弾に、命中を確認しました」

「では、続けてミサイルによる迎撃を！」

「あれにミサイルは効かんよ。速度の減衰位にはなるうがね。粒子加速破砕砲も使い給え」

過去の交戦記録から、巖仁は、耀子の命令に追加を施す。しかし、応へるオペレーターの言葉の調子は、やけに重かつた。

「申し訳ありません、閣下。砲の多くは、整備中でして……使用が可能なのは、全体の二割程に留まります」

「構わん、可能な限り撃つのだ！　他の装備も、あるだけぶち込んでやれ！」

「りよ、了解です！」

崩壊砲のある方の山腹より、砲や発射口が顔を出し、衝突間近の黒塊に荷電粒子ビームや誘導弾を叩き込んでゆく。爆炎や光でそれらの全容は窺ひ知れなくなるが、一拍置いて、轟音が鳴り響き、更

地となつた皇都が揺れ動いた。

「目標、地表に到達！　　ですが、市街に目立つた被害はない模様です！」

「やれやれ、一先ずは凌いだかいの。よもや、障壁を抜けられるとは思わなんだが。　　それ、敵艦の次の動きを警戒せい」

溜息を吐いた源左右は、髭を弄びながら指示を送る。

「安心するのはまだ早いですよ、源左右君。そもそも、あれが核兵器だという確証ありません。落下物の確認を急いで下さい」

詔を受け、正面スクリーンに、墜落現場が拡大された。濛々と立ち込めてゐた煙は幾分か薄らぎ、小破した物体が、そこここに顔を覗かせてゐる。

「やはり、堅いか。……しかし、あの大きさは何だ？　まるで、何かを格納するかのような　　」

源左右が呟いた所で、映像に変化が生ず。塊に亀裂が走り、全体にビシビシと広がり始めたのだ。さうして万遍なくひびが入れば、それは遂に、砕けて粉と散つた。

「な、あ、あれは？！」

その後に残つたモノを見て、耀子は、年甲斐もなく悲鳴を上げる。茶褐色の、分厚い鱗に覆はれた肌。爛々とした、細い瞳孔の眼。

赤く裂けた口に植わる、鋭く尖つた牙、二股の舌。先の外装と同質と見える鎧に身を包むそれは　　果たして、巨大な蛇であつた。

「目標内部から、信じられない大きさの爬虫類が出現しました！」  
蛇だけではない。他のコンテナからは、亀、蜥蜴、鱒などといったものが這ひ出して来る。それらもまた、押し並べて体長一〇〇mを超えてゐた。

「迎撃、迎撃だ！　ミサイルでもレーザーでも、とにかく浴びせかけろ！」

「ですが、それですと、市街上層に多大な被害が……」

「では、あれの使用を許可します。　　源左右君」

帝の竜眼が、陸軍総司令官を射抜く。彼は、即座に敬礼し、通達



を行へり。

「要塞内の、全機動歩兵を出撃させるのじゃ！」

\*\*\*

一二時一〇分

しろかね屋 地下一〇階

「おい、見るよ畦穂！ 謎の墜落UFO群から、とんでもない怪獣が出て来やがったぜ！」

生氣を取り戻した大莫は、自分のコンピュータの画面を食ひ入るやうに見つつ、堅物の格闘少女を煽り立てる。要塞ライブカメラには、四〇？上空の空中戦艦は映つてをらず、二〇分の沈黙を破り現れたそれらに、昂奮も一人の様子だ。

「そんな、まさか、こんなことって……」

一方の遙は、臨時報道を受信する端末を取り落とし、白い顔を真青にしてゐた。洸はそれを拾ひ上げると、彼女の手に戻し、背中を擦つてやる。

「ハルカ、大丈夫？」

「スケールが百倍になれば体積は百万倍従つて重量も単純計算で百万倍その為骨格等プロポーションの維持が困難になりあれだけのサイズでは自重で潰れない訳がないよしんばその問題をクリアしたとしても神経の伝導速度は不変であるから機敏な動きは不可能」  
などと、早口でぶつぶつ呟いてをり、彼はとしては動揺を隠せない。

「どうしようダイモ、ハルカが壊れた！」

「んなのは、割といつものことだろ。……それよか、凄いぜ洸！  
今度は巨大ロボットだ！」

洗が遙に付きぬる内に、皇都の情勢は変はつてゐた。カメラの向かう、彼らの頭上で暴れ始めた怪物勢の行く手を阻むやうにして、黒鉄の機神達が一五ばかり立つてゐる。全身を覆ふ、陽光を鈍く照り返す光発電パネル。髷面で大きな笠を被り、背中には籠状の推進機構。手足は太く、どこことなく、泥臭さと力強さを感じさせる。六七式汎用人型機動兵器>アシガル< 皇國軍が、地底都市や民間企業と提携し作り上げた、最新兵器である。大きさだけを見れば敵性体の三分の一程度だが、尻込みする様子はない。各々剣や棍や銃を構へてをり、まさに一触即発といふ雰囲気だ。

「デザインセンスは疑わざるを得ないが、これなら、連中に立ち向かえる！ だろ、畦穂？」

「人型はバランス調節が難しく著しく安定に欠ける為兵器として運用するにはとんでもなく効率が悪い構造的に見ても関節部の多さから脆弱性の指摘は避けられずまた装甲も薄くなりがちで巨大口ポットともなれば被弾率も当然上がる視線位置が高く足元が不覚になりがちで立っているということ自体も単なる的に成り下がる危険を助長し制御に至っては複雑な人間の神経系を再現するなどという馬鹿げた芸当は出来る筈もなくミスやエラーの頻発に加え整備の難しさもあり」

「駄目だよダイモ、ハルカったら、もっとおかしくなっちゃってる！」

「だったら、耳元で、現実を見るって伝えてくれ！ ……おい、また何か来たぜ！」

アシガル軍団の先頭に、大きな光の柱が一本立つた、中から現出したるは、アシガルとは対照的に、白い着物に身を包んだ巨人である。笠や籠以下機械的なパーツは見られず、骨格フレームに人工筋肉を搭載しただけの簡素な造形。頭は目と鼻以外を布で覆ひ隠した風で、口に当たる部分に巻物風の筒を啞へ、後頭部から五本の角を生やしてゐる。白い忍者といふ倒錯的な格好のこの機体は、六〇式特殊人型決戦兵器>冷泉< 人型兵器部隊隊長桐谷龍祐の専用機

だ。彼は、突き出した右掌から氷柱を生じ、瞬く間に身の丈二倍の矛槍を作り出だす。そして、大地を蹴り、怪獣目掛けて飛び出した。アシガル勢も、ジエツトを蒸かしてそれに続く。

「おい洗、今の動き見たかよ!? やべえ、これはマジでやべえぞッ……!」

だが、その時には、大莫の声に応へる者はあなかつた。隣では、一人畦穂遙が人型兵器の欠点を論ぶ已。彼は首を捻れど、「チビって厠にでも行つたんだろっな」と理解し、画面上に目を戻した。

\*\*\*

一二時一五分

地底都市ツクヨミ ニコラニテスラ研究所前

「え? どっ、ここ……」

色とりどりの結晶でできた構造体が建ち並び、やけに低い空には、幾つもの小さな太陽が等間隔で輝く。奇妙な植物が至る所に繁茂し、小鳥とも昆虫ともつかぬ生物がその間を忙しなく飛び回る。少年は、突如目前に広がった地下世界の不可思議な情景に、あからさまに不安の様相を呈した。

数瞬前まで、確かに洗は、仲間と共に皇都の地下にゐた筈である。しかし、辺りに遙と大莫の姿はなく、代はりに、若い女が一人、背後に立つてゐた。藍色の髪に、白い軍服。彼女に心当たりはなかつたが、ここで洗は、飛ばされる直前何者かに肩を掴まれたことを思ひ出す。

「すいません、ここは、一体どこなんですか? あ、僕、來傳洗つて言います」

取り敢へず状況だけでも把握せむと欲し、彼は、謎の女士官に話

しかけた。普通であれば、頭を疑はるやうな質問だ。が、彼女は、曰くありげに三角メガネを上ぐると、微笑みを崩さずに応待せり。  
「ええ、知っているわ。何てったって、キミは、私がこの地底都市ツクヨミに連れてきたんだもの」

「地底……都市……？」

「知らなくても無理はないわ。でも、ごめんなさい。今は、説明している時間はないの。私は理生〓テスラ、見ての通りの軍人よ。単刀直入に言っと、來傳くんには、侵略者の軍勢からこの日本を守つて欲しいの」

当然洗は、目を円くする。そして間もなく、疑ひの色を浮かぶ。

「僕なんか、何ができるっていうんです？ なんの力もない、ただの高校生ですよ」

「心配しないで、そういうのはあんまり関係ないわ。男の子なら、どーんと構えてればいいの」

「何だか、すごく胡散臭いなあ」

「まあまあ、そんなこと言わないで付いて来て。中で、詳しい話をするわ。協力してくれるかどうかを決めるのは、それからでもいいから」

理生は、大きく開かれた入口から、父の研究所に歩み入る。今皇都に戻つても仕方がないと思ひ、洗もそれに続く。彼女が指を打てば、洗の視界に映る景色は、瞬く間に用途不明の機械群ひしめくらボへと移つた。

「ただいま。デュリたん、この子で間違いないのよね？」

「ほう、存外に早かつたのう」

舌足らずな声とアンバランスな爺言葉で応ふは、黄銅色の肌の女児だ。体型は幼く、見かけの齡は十ばかりか。赤と橙の混じつた短髪で活発な印象だが、じとりとした金の垂れ目のお蔭で、一癖ありさうな雰囲気は漂はせてもゐる。

「紹介するわ。この娘はデュリアゲーゼ、今日からキミのパートナーよ」

「久しいの……と言っても分からんか。確か、地球に生まれる為には、記憶を封ずる必要があるという話じゃったしな。　ともかく、宜しく頼むぞい、洗」

デュリアゲーゼは、彼に右手を差し出す。反射的に握手をせむとした洗であつたものの、彼の中の守銭奴根性が、それを踏み止まらせた。

「ちょっと待つて下さい。僕、日本を守れと言われただけで、具体的に何をするのかまだ聞いてません。契約してから本当のことを知つて後悔するのは御免ですから、きつちり説明してくれますか？」

「そうだな。ではそれは、私の方から話そう」

この場にある少年壮年二人の作業員の内、年輩の男性が立ち上がる。ニメートル近い長身で、洗達は見下ろされる形だ。彫の深いハンサムな顔立ちをしてをり、髪と眉は理生と全く同じ青である。

「理生の父のニコラだ。洗君といったね。君は、古代の機械鬼神デュリアゲーゼの操縦者として選ばれたんだ。君には、彼女を駆つて地球の人々の為に戦つて貰いたい」

「え、デュリアゲーゼつて、この子ですよね？」

「これ、指を差すでない。　こつ見えて儂は、ロボットの管理の為に創られた人造人間での。人型兵器を靈に同化させ、自由に物質化・非物質化できるのぢや。無論、戦闘中の主の補助もするぞい」

デュリアは、ない胸を張つて洗を仰ぐ。対して彼は、疑惑の視線を送る。

「どこから突つ込んだらいいのかな……じゃあ、一番重要なことだけ聞かせて下さい。乗るのは、どうしても、僕じゃなきゃ駄目なんですか？」

「その通りぢや。ロボットの起動キーとして、主の靈が設定されておる。尤も、それでなくとも、主以外の連中に動かされるのは、絶対に御免被りたいがの」

「ふふ　いきなり愛されてるわね、來傳くん？」

ぞつこんを茶化す理生。そこに、もう一人の研究員が冷ややかな

目を向ける。デュリアと同じ位の年頃の生意気さうな少年で、長い黒髪と身の丈に合はない下士官制服が特徴だ。

「冗談を言ってる場合ですか。こうしている間にも、父上たちは皇都で戦っているんですよ」

「あれ、君は確か、ハルミさんの」

桐谷和宏と面識のあつた洸は、至極意外さうに声を上げ。しかしそれも、少年の冷徹さの下に一蹴された。

「後にして下さい」

和宏は、空中に浮いた画像を突き付け、テスラ父娘の説明を引き継ぐ。

「これが、デュリアゲーゼです。全高一一四メートル、重量四四〇〇トン。操作は精神感応で、手足のように動かせると理解して貰えば、それで十分です。さ、分かったら早く行って下さい。皇都には、あなたの友人もいるんでしょう？」

「そ、それはそうだけど……でもこれって、傭兵になれってことですよね。僕、独り暮らしで生活が苦しくて、バイトしなくちゃいけないんですけど、パイロットになったらそれも満足にできなくなるし」

彼はそこで言葉を濁す。そして、数秒溜めを作ると、躊躇ひがちに口を開く。

「あの……幾ら、貰えるんです？」

「新兵の給金は、月手取り十五万円よ。尤も、非常勤の外部協力者だから、出撃一回百万円とか、そんな感じになると思っけどね」

理生の言葉を聞いて、洸は逡巡する様子を見せた。

「百万、ですか。バイト代と比べれば高いけど、それに命を懸けられるかって言われると……」

「何を言つとるか、洸！ 主には、力ない人々を守りたいという気概はないのかえ！？」

「それとこれとは、話が別だよ。危険に見合った報酬を得られないんじゃない、そんなのは仕事と呼べないもん」

洗とデュリアの間で、口論が始まる。そこに和宏も加はるのだが、渋る洗は、なかなか首を縦に振らない。見かねた理生は、とある提案をした。

「ねえ來傳くん、学校辞めて、この地下都市に住む気はない？　ここは、食べ物も住む所もエネルギーも全部タダで手に入るから、お金なんかなくても生活できるわよ？」

「本当ですか？！　うーん、それなら　あ、でも、やっぱり大学くらいは出ておきたいし、ハルカやダイモやハルミさんともまだ一緒にいたいし……」

「そういうことならば、私の方から九百万出そう。一回の出撃で一千万円なら、文句もないだろう？」

テスラ父が、こともなげに言ひ放つ。一気に十倍に跳ね上がったことで、洗は、うつて変はつて掌を返した。

「い、いいんですか、そんなに？！」

「構わんよ。昔は、特許というものにちよつとした拘りがあったね。地上で無暗矢鱈と取得しては、多額の特許料を得ていたんだ。といっても、ここでは金銭が必要ないし、表向き、地底人は地上に干渉してはならない決まりだったからね。銀行の中で遊ばせている内に、すっかり処分に困るような額になってしまった。だから、遠慮せず受け取つて欲しい」

「ありがとうございます、ニコラさん！！　じゃ、早速行こっか、デュリアゲーゼ！　怪獣退治だ！」

洗は、意気揚々とデュリアの腕を掴む。

「お、おう。なんぢや、釈然とせんが……」

操縦者のいきなりの態度の変化に戸惑ふ彼女。一方理生は、皇都に置いてきた理世と連絡を取る。

「理世、そつちの調子はどう？」

正直、戦況は芳しくねえな。五匹倒したが、こつちも三機潰された。相手がデカ過ぎるせいで、アシガルの攻撃がらくすっぽ通りやがらねえんだ。大佐の技とトムの補給のお蔭で一応何とかなってる

が、それもいつまで保ったものか……

「分かったわ。すぐに來傳くんとデュリたんを向かわせるから、そ  
ちの座標送って！」

さうして情報を受信するなり、件の二人に手を差し伸べた。

「さ、行くわよ、戦場に！」



## 第一章『来襲（インカーシオン）・後』（後書き）

UFOだ！ 怪獣だ！ 巨大ロボだ！

非常識な奴らの、超常的な戦ひが、今ここに幕を開けたり。

鍵を握るは、古代の機神>デユリアゲーゼく。

一体彼女は何者なのか？

ここは一旦時を遡り、デユリア復活の経緯を辿ってみることにしよう

次回『デユリアゲーゼ結晶巨神』

果たして、日本天皇御國の運命や如何に？

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1728y/>

---

煌きの救世者《ブリリアント・セイヴァー》

2011年12月23日00時46分発行